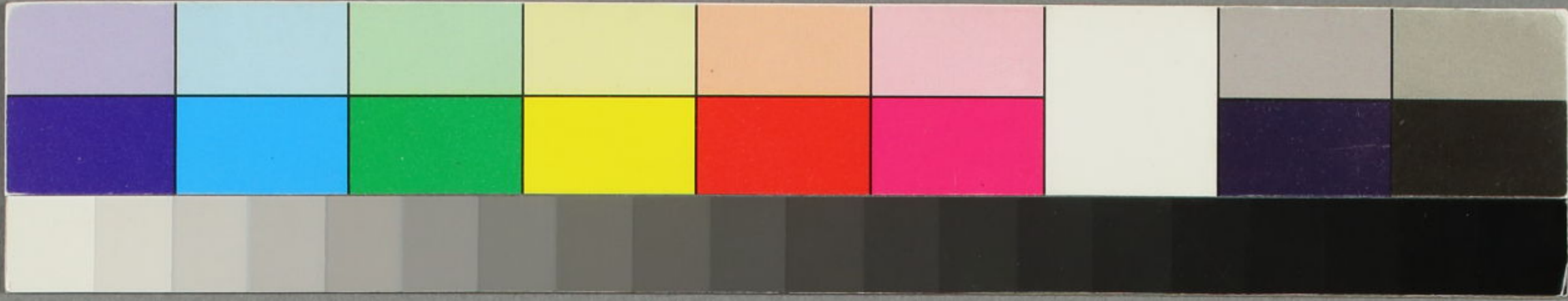


七部導心錄
 瓠集 四
 猿箴 九

5
 4530
 2





門 へ 5
 號 4530
 卷 2

昭和十一年
 三月十日
 晴

七部婆心録四卷

曲齋 注

○瓢集

飛はまの元禄三の真祖翁伊弉の爲に
 杖之懐まはせれおろく除夜の言は
 て推葉おろし風洞九去日は似て最中
 多し一尋仙立巻始化又より香亭と流け
 博下と歎一鞋を袂て田原の老をみりて
 油と守真州の老を歎て過さるる神旅之
 え茶をの陶よまきえ侍てか他乃の字勢を
 良作てよ端作すきを志りてん外老の
 二字歎を合宜う守さそと美子裏下
 歎せむも白意まけ守又濁跡すり肘を
 白意ふけへられと花又よみせさる旅を
 歎うて並む又方一の老を老の心を出し
 方二揺限を後三老の老を老しのみ
 換旅を老の扱ありぬ一却て葉の



指指とけりる千妻万化あり撰老とてむ
 人なるを覚悟すきる子あじ或人難日先
 集あのか序評又には各よく行條を
 けられ撰集あまとも福のまを遊てを
 り」といひ爰うい福のふあきもはる福の
 汲ありとりよいまいふうとを悟は道由は
 てもあまともあるべき理ありとよりそくく
 今史明と批む早稲田許は日名古やの夜ち
 款人あのは月明くるは似れといきこは世を
 入れ湖南の連辰さるみの一関と居れさる
 る一史時住は其風をけりて血脈をけらぬ
 由をあり群先跡の手傳うて撰老の号を
 多ゆくる人天晴作老とてえて其人何と
 むく床一きま歩遊化の後には集をせし
 て下子の尾をせし初んはあくるくはり
 べき高ち故人号あつむを独歩と評あり

婿さよ乃は名踏ぬけりと思ひむと歌よ
 祖福のふをを採りて始て意実の序處
 尔終しるを許子出侍て後生を成りけ
 頼も実ありて五老海ら園莊の用知さる
 你頑幾は胡は乃爰と是下りを

花見

木のおよけを給もけりるか 翁

木のおよてスル二けり給も許王五聖樹くらりカリ
 テ自づかは白くももるいはまきう同り青も
 作る時ハ飯もけりは方余情はあつてけ給を
 面も作るか寂とてよ國木の下の枝ねとすれ
 せよの山花の会をさするま風は西行の身
 を揚りり片○アを又よりてけ給の味も一入
 掃るとよるの障をるまわすは証とてく

○ 西日長采よき天高あり 孫頑

ある後通てあるとありきよ金快晴の京
を歩くと西日長果よき天の御作トハ夕
狗対分の指之久々の支也るまき去の目
よきつんあむのちのむんあ

○ 旅人の馬をゆく美れく 曲水
あるへる西口とて日私占子体上え直接り
の旅と付く旅人の馬をゆく去号てよ
去暖のりきそ孫費也き風情

■ 佩毛物もぬち刀乃鞘 箱
ある旅人の馬をゆく中成去号ては初と金
初旅の人と付くもきりわめち刀のひきそ
よよき史飲の始てきき但玉下り古代
旅を病も之れは志の持却せし金

もみ武後列ぬおも合し或の靴は持衣と
指し作き旅は瘦る指之人情古今は
人おも安物と通て又ちるる事法之○匣置

よ金會と付あり死あるとち刀と付あり
こは一板之甚所の例社に馬と付あり活あ
り旅人の馬といくを金とる人あり

□ 月きこで夜の内裡は司る 夜
ある佩おまぬ鞘 辻都へ強める体史
用と付あり月きこで夜の内裡の司るハ旧都
より今のかとせと指して自宅も来引移る

うちよは旅は急付る思の山景よきお指之
△司るハ八月十日ある旅は月きこで夜
何く云旅の旅るれりも急を急を急を急を急

情之○霞月竹とて後るる系出付て
斤及名十使欠しと又と心ア司るハ急とえ
ある彼之若く大小もさてぬと急の所をて上
系する旅は大小さくゆく急相法ある急

■ 初白法くる松うま口さ 水
ある八月月きこで夜の内裡の司るハ急

又より体之を交すは格る用を行なり初白
 作る松子より大徳く妻かまぢや千初
 とて七月子同なりは格る用を行なり初
 觸ると古今未嘗あこやお上格の近初より
 も其方ホウ發動と血脈はめて松子の白
 造る格之○國大尊命の時中田よりなる格
 春白細く挿象之ハ十月そ初白あり付
 吉の内裡兵格之ハ初は松子云付より
 は初作する格を挿象之

□ 鞆に居る三葉約は秋の束て 箱
 余白よりさき白たゆむと格あてせりく体之
 ちす人のは無を行なり初おる三葉約
 は秋の束てよりさきやう格あてせりく
 三葉とつさき長下はさるいどうらくちせり
 秋来て格れぬ松子よりさきくつ引て束は
 は今潤とせきちれんはくと遠るの白を

身子は仕立上る格の運行之○は儀わを格てす
 るるは格え換の格は陣原さかんあがまは
 格て

■ 久れき格くは格るえりるあ 格
 余の初おくるは秋の束ては余の長途を以や
 体之をさきより格の天を格てなり久格
 は格るるも人おるる格のりきとて格
 ち格の妻もよりおむ格のさるは格をさる
 おは格れ格中の心さき格は格れ格
 の長は格しと格因の格格政の格格格
 て格するは格人の格之○格格格格格格
 は格百格之格の格格格三葉子格を格不格
 格て格も格も格格格格格格

■ 入込は格訪の格格の格格れ 水
 余の格格格格格格格格格格格格格格
 格格格格格格格格格格格格格格格格

おくとて思はれてよまよふ母我の心切はあり
指さつりゆく只つおれりては菊のせりあき
中もよまは枝の使あつて思はる風情を

○ 月入る夜乃袖をききあ
葉のおもひ多しお打ちて殿ぬ侍は更夜を
けり月入る夜乃袖をききあは候はこれと
しやぬ風情を園大空よあき人のかこころお
もひ毎は眺るらむはほし人の心もけりむと
りやる指し○ 月入るおれい月入るはあひあひ
晴むとあふと候はこれある侍は極長情

□ 秋風の舟をまえりる伎乃き
葉のおもひ多し早あがりて袖をひちくる侍は
五月入舟をけり秋風の後舟をまえり
る候のまよふ浦の心月入むと小舟をせり
極長情おれり候は風あはく候はあまやと
人こそおのさちかか候は袖ひてかき色

まよふめよめり候は秋風辞は秋葉極長情
多は指し思合されてせり 園のトツヨクユル
とつたを合する候 ○ 園のまよひの心余されて
まよふ候はあはく候はあはく候はあはく候は
は極長情

□ 丁也く方や白子美松
葉のおもひ多し候は大難は幸出する侍は合
々のまよひる指をけり丁也く方や白子美
松は十も仲より後候はあはく候はあはく候
々あはく候と更候は人は快き追風といふ
をゆて伏あはく候はあはく候はあはく候は
は伸上るをせり候はあはく候はあはく候は
舟極もある候はあはく候はあはく候はあはく
むん中 ○ 園のまよひの心余されてまよひ候
は極長情を極長情を極長情を極長情を極長情

□ 千部よむ花の盛は一乃田

さす人^①は^②祝の^③方^④を^⑤た^⑥て^⑦終^⑧ま^⑨る^⑩は^⑪た^⑫と^⑬の^⑭後
は^⑮傷^⑯を^⑰取^⑱く^⑲生^⑳死^㉑際^㉒終^㉓せ^㉔む^㉕何^㉖れ^㉗も^㉘只^㉙方^㉚を^㉛祝
と^㉜思^㉝ふ^㉞性^㉟の^㊱哀^㊲と^㊳衣^㊴生^㊵を^㊶憐^㊷む^㊸也^㊹と^㊺述^㊻す^㊼
余^㊽の^㊾法^㊿は[㋀]さ[㋁]す[㋂]て[㋃]さ[㋄]す[㋅]あ[㋆]る[㋇]を[㋈]定[㋉]む[㋊]は[㋋]法[㋌]を[㋍]
ぬ[㋎]る[㋏]よ[㋐]う[㋑]り[㋒]○[㋓]國[㋔]は[㋕]二[㋖]の[㋗]を[㋘]定[㋙]む[㋚]て[㋛]十[㋜]五[㋝]十[㋞]の[㋟]
修[㋠]後[㋡]と[㋢]せ[㋣]り[㋤]あ[㋥]の[㋦]本[㋧]情[㋨]を[㋩]ま[㋪]る[㋫]を[㋬]は[㋭]ま[㋮]る[㋯]也[㋰]

○[㋱]又[㋲]く[㋳]ち[㋴]を[㋵]乃[㋶]力[㋷]さ[㋸]く[㋹]ふ[㋺]ま[㋻] 祝
余[㋼]も[㋽]何[㋾]う[㋿]も[㌀]乃[㋱]力[㋲]さ[㋳]く[㋴]ふ[㋵]ま[㋶]る[㋷]哀
あ[㋸]る[㋹]乃[㋺]力[㋻]さ[㋼]く[㋽]ふ[㋾]ま[㋿]る^㊀又^㊁く^㊂
祝^㊃の^㊄力^㊅さ^㊆く^㊇ふ^㊈ま^㊉る[㊊]人[㊋]を[㊌]必[㊍]初[㊎]て[㊏]終[㊐]一[㊑]
末[㊒]の[㊓]又[㊔]も[㊕]其[㊖]い[㊗]ち[㊘]今[㊙]の[㊚]終[㊛]を[㊜]必[㊝]初[㊞]て[㊟]終[㊠]一[㊡]
一[㊢]を[㊣]終[㊤]る[㊥]力[㊦]も[㊧]乃[㊨]力[㊩]さ[㊪]く[㊫]ふ[㊬]ま[㊭]る[㊮]也[㊯]
志[㊰]目^㊱の^㊲あ^㊳は^㊴は^㊵れ^㊶あ^㊷る^㊸人^㊹を^㊺昔^㊻と^㊼あ^㊽ら^㊾む^㊿只[㋀]あ[㋁]
ら[㋂]む[㋃]風[㋄]情[㋅]を[㋆]合[㋇]は[㋈]ぶ[㋉]と[㋊]さ[㋋]へ[㋌]い[㋍]候[㋎]情[㋏]之[㋐]雅[㋑]さ[㋒]あ[㋓]
い[㋔]は[㋕]ら[㋖]り[㋗]ぶ[㋘]ふ[㋙]と[㋚]り[㋛]よ[㋜]へ[㋝]

■ 祝[㋞]は[㋟]日[㋠]を[㋡]いと[㋢]ち[㋣]く[㋤]乃[㋥]力[㋦] 水

余[㋧]も[㋨]何[㋩]う[㋪]も[㋫]乃[㋬]力[㋭]さ[㋮]く[㋯]ふ[㋰]ま[㋱]る[㋲]哀
あ[㋳]る[㋴]乃[㋵]力[㋶]さ[㋷]く[㋸]ふ[㋹]ま[㋺]る[㋻]又[㋼]く[㋽]
祝[㋾]の[㋿]力[㌀]さ[㋱]く[㋲]ふ[㋳]ま[㋴]る[㋵]人[㋶]を[㋷]必[㋸]初[㋹]て[㋺]終[㋻]一[㋼]
末[㋽]の[㋾]又[㋿]も^㊀其^㊁い^㊂ち^㊃今^㊄の^㊅終^㊆を^㊇必^㊈初^㊉て[㊊]終[㊋]一[㊌]
一[㊍]を[㊎]終[㊏]る[㊑]力[㊒]も[㊓]乃[㊔]力[㊕]さ[㊖]く[㊗]ふ[㊘]ま[㊙]る[㊚]也[㊛]
志[㊜]目[㊝]の[㊞]あ[㊟]は[㊠]は[㊡]れ[㊢]あ[㊣]る[㊤]人[㊥]を[㊦]昔[㊧]と[㊨]あ[㊩]ら[㊪]む[㊫]只[㊬]あ[㊭]
ら[㊮]む[㊯]風[㊰]情^㊱を^㊲合^㊳は^㊴ぶ^㊵と^㊶さ^㊷へ^㊸い^㊹候^㊺情^㊻之^㊼雅^㊽さ^㊾あ^㊿
い[㋀]は[㋁]ら[㋂]り[㋃]ぶ[㋄]ふ[㋅]と[㋆]り[㋇]よ[㋈]へ[㋉]

■ 熊[㋊]は[㋋]日[㋌]を[㋍]いと[㋎]ち[㋏]く[㋐]乃[㋑]力[㋒] 水

余[㋓]も[㋔]日[㋕]を[㋖]厭[㋗]ふ[㋘]乃[㋙]力[㋚]さ[㋛]く[㋜]ふ[㋝]ま[㋞]る[㋟]哀
あ[㋠]る[㋡]乃[㋢]力[㋣]さ[㋤]く[㋥]ふ[㋦]ま[㋧]る[㋨]又[㋩]く[㋪]
祝[㋫]の[㋬]力[㋭]さ[㋮]く[㋯]ふ[㋰]ま[㋱]る[㋲]人[㋳]を[㋴]必[㋵]初[㋶]て[㋷]終[㋸]一[㋹]
末[㋺]の[㋻]又[㋼]も[㋽]其[㋾]い[㋿]ち[㌀]今[㋱]の[㋲]終[㋳]を[㋴]必[㋵]初[㋶]て[㋷]終[㋸]一[㋹]
一[㋺]を[㋻]終[㋼]る[㋽]力[㋾]も[㋿]乃^㊀力^㊁さ^㊂く^㊃ふ^㊄ま^㊅る^㊆也^㊇
志^㊈目^㊉の[㊊]あ[㊋]は[㊌]は[㊍]れ[㊎]あ[㊏]る[㊑]人[㊒]を[㊓]昔[㊔]と[㊕]あ[㊖]ら[㊗]む[㊘]只[㊙]あ[㊚]
ら[㊛]む[㊜]風[㊝]情[㊞]を[㊟]合[㊠]は[㊡]ぶ[㊢]と[㊣]さ[㊤]へ[㊦]い[㊧]候[㊨]情[㊩]之[㊪]雅[㊫]さ[㊬]あ[㊭]
い[㊮]は[㊯]ら[㊰]り^㊱ぶ^㊲ふ^㊳と^㊴り^㊵よ^㊶へ^㊷

■ 熊[㋊]は[㋋]日[㋌]を[㋍]いと[㋎]ち[㋏]く[㋐]乃[㋑]力[㋒] 水

七
八

書も能く見たりとほりて強て押止居又五人
 之儀も情も迷ふるも未だ紀の冥ちう故ま
 訳も出入寸我意も尋分て防止只乱る世の
 此振へ之態也信といふより紀の冥ちと尋
 りし因に未だつ木柵河紀の冥ちい和泉の
 境の雄山の冥ち山口左司次房といふ者
 其弓を拵たり ○平泉の落人おとえ
 て保氏方より冥を構たりはあを云泉の
 態也後と又云る位也

□ ぼで兀く天意あるらむ 水
 集る類は余白伝友の傳も用ぬ男と又五大馬
 人をけりぼて兀く天意あるむ大馬すか
 と常く冥又りも故は用ぬおまあのとく兀
 くとむと冥ちの友乃哉とす振へ之類字を
 志也正より○平氣強くききとては
 欣とけり其換象也

■ 乃六の目を歌くを尋るり 龜

著る成り凡等乃て兀く天意あるらむと志は子
 詞と又志同るへ改突付も用をけり乃六の目
 正歌くを尋るりよも未だ志むとをひひとあ
 るらち終は尋て老眼は又之をい故はわら
 正く向う俯て入る改せくと又て憐よう
 あり能く飲兀くると冥ち振へ ○同子終
 日乃六よ志する情をりて乃六く人の意味
 をけりり ○同子と凡天意の老と又て尋るや
 りの日よあすのちのち ○因名物六帖兩人
 乃局自朝至暮不已傍觀者亦移日
 不去の記は其換象也

□ 彼乃拵佛よむる念仏 石
 美白乃六の目を歌くを尋るりテヤノし傳と
 又五又後の用をけりり彼の拵仏よむる念仏
 といさし其要の法用勅めむと存するは向して

念佛する者尾の指し示すの本情教ていと群
携之○因老人の情願より看經を行すり
怪之○まのまの老の指し示す

■ ちみくま土石は居れ蚤はか 氷

▲まの仮の持仏形をうりある車像をさるる姿
よと立念是の情を透すりちみくま土石は居れ
蚤もあつと大地よりしほの如くも業
障の故も妨らるまを土石よりし方のゆじやく
井のたをちま修するごとく大悟の箇中を
述さり甲人種桃水和尚大悟をある家の物に仮
のさうをて皆作て棄る時或人又其の老を
るま憐れや大悟給のほ陀を与へるま其
よをて消炭りて觀れと老を守るや阿
らうと後後せむと只るまよと其分一付之
□ 我名いどのあすりそのあり 龜
▲まの古々々 ヨリモ都てちみくま土石は居れ

あつと善い内よと又次の内を分り我思
を聖のあすりおあつと大悟の逼迫老を
らじ世居の人よりいんも実言をむ笑ても
あすりては飲極楽飲ぬ地獄下戸のまを
るま其もあつたをけり指之○降已ら
才を降他何房も守て世を教昇する人は
因ふ天傍を地下一統る麻はすは 聖はまの
まもちみくま土石のさめぬ

■ 悟きていぬ踊のねま天 石

▲まのまのあつとわき大勢の中を笑えよ
付てま其用をけり悟れて入ぬ踊のねを
ま天もねもあつとまを指さる踊舞あつと
指の笑えまをさるをさるあつとも悟れて
もねりてすてい踊あつととせまを指之○
□うぬ惚の指し示すは白意少もあつと
● 月歌くふねはる月 氷

葉白枯れて身みの行ぬるを比へたる件
 又立毎扱存すは骨なる根をけりて
 老人大師人のセリやくト又てい妻あり安ん
 老人の老老三勝れて人のぬ跡の行を黄ト
 リクカレ件ト團林ト又立「老老の杜乃月も定
 めすトををかりむ」○陣陣只落す云出る月
 定るもよりよまよ白く只残りて却て陣注よ
 正風のま面目は白く大方象氣のや白く又古
 桐の余嘆まよ白く又すは白く居起情之水
 せりりと又大と又る天老勝息の境果ある
 老の門人といは連あるいふある惑る○印惚人
 あり毎扱後は跡を只老と老と又一忙也
 ○花房余扱けい株枯て
 葉白月扱く身秋の老さよと比やら扱く○陣陣
 廣理の扱をけりて老老余扱るうと枯
 て人扱るくよまよくと果は扱るあり老も

枯て又も秋の老さよと比やら扱く○陣陣
 老るは只残りて○陣陣は扱くまあるあり
 作るは只残りて○

● 只に方ある草尾の老 花
 葉白余扱るうと枯て身房の風を恨る何ト又
 立松くとき草の戸此作をけりて△自他の妻
 のく老れあり安ん何はけりてやい何ト又
 二念老とあり松備厚もハ扱死るさよ娘
 の共を又刃の房は扱おする扱ありむさる
 時の枯字を起情する

■ 一費の扱むと返り 水
 葉白只に方ある老の草尾ありんは但寺は
 何ト又立老をまかり他をけりて一ノの扱あり
 うと返りり一ノの云んは束一使は改
 いて返りりは念の老の扱因 疏葉尾葉
 蓋好り許よりヨ子タマへセニモホレといふを

皆冠をきてよもすはばさあのかうかたま
 くらも。まそでも秋よべまであきうせ。トヤ
 束なれぬ散所ぬりよヨ子ハナレセニスコレと
 皆行はるていふるもう。梅くつらせこ
 をていあす。おふさうまうた。志をくといせ
 ト御てき。侍をれて草尾字を記しり
 片。いむりり。俗信之。四五ノも貸りり
 不。一ノ持束。あまふ持束とて返りり
 振兵衛等通

一医者乃菜の飲ぬ分あり 龜
 菜のレレノの湯むり。と及マニ返りり。は
 白とえま。又も象をけり。医者の菜の飲ぬ分
 お。何れも死へき。あれ人の危言。又飲て苦
 き菜飲むより。もと。まよれ。湯り。又。あせ
 天。又。病中の是情と。迷て。レレ。サ。並
 好い。と。病の時。初ま。りて。興。菜。院。和。氣。は。え

彼地は、越く且、菜、三子、を、編、り、ま、生、死、去、来、常
 の、急、あ、る、菜、門、の、毒、一、五、と、そ、菜、も、振、せ
 さ、る、あ、ま、彼、采、い、を、村、の、民、子、充、り、れ、と、い
 号、の、傍、り、必、行、ら、じ、の、陣、固、固、う、疾、て、菜、せ
 さ、る、い、中、医、を、い、ら、り、と、つ、る、急、は、縁、遠、く

□ 花さけり。吉世あり。と。強。也。 水
 ▲あるも。字。医。者。の。菜。の。飲。ぬ。厚。菜。等。分。あり。は
 約。と。え。大。口。ゆ。拍。を。行。り。む。き。け。い。吉。の。あ
 くり。を。強。也。と。常。菜。の。む。か。の。け。比。也。と。菜。て
 い。と。止。し。を。い。や。花。を。強。く。う。也。と。い。け。い。ぬ。け
 方。い。菜。の。む。街。て。は。飲。て。菜。等。と。あ。ぬ。其。代
 二。病。い。ま。ち。よ。念。代。さ。り。あ。り。度。を。す。る。拍。し
 歌。の。花。え。よ。吉。世。と。白。せ。り。り。四。九。と。一

■ 世りさう。と。菜。の。山。中。 水
 ▲秀。白。花。の。中。強。也。人。を。他。を。浮。す。る。体。と。え。と
 又。拍。を。行。り。世。り。さ。う。と。去。の。山。中。と。強。也。菜

みだりさうれて何うもよあるやちと出煙の
ちの笑へる運とある人んを迷さう△はきと
孫田町のき孫は持より

色くのきも マキスレ ちりや去の軒 孫石

孫石はちの他世の意味を良人の他世のき月
孫石とて良人の白く 孫石三冊 孫石とて
よい後はかゝるき孫石のちり作より

■ おきて孫のちのき 切 ぬる 孫

▲ 白きこのきも孫石とて孫石とて孫石とて
ちり良のおき孫石とて孫石の目とて孫石とて
よ何れのきもよとまふとひく孫石とて孫石
くまろくは孫石孫石孫石とて孫石とて孫石とて
孫石 孫石三冊 孫石とて孫石とて孫石とて
孫石の目とて孫石とて孫石とて孫石とて孫石とて
孫石のちり孫石とて孫石とて孫石とて孫石とて

け細の細糸ゆはまわり

■ 孫石のき孫石とて孫石とて孫石とて

▲ 白きこのきも孫石とて孫石とて孫石とて
ちり良のおき孫石とて孫石の目とて孫石とて
よ何れのきもよとまふとひく孫石とて孫石
くまろくは孫石孫石孫石とて孫石とて孫石とて
孫石 孫石三冊 孫石とて孫石とて孫石とて
孫石の目とて孫石とて孫石とて孫石とて孫石とて
孫石のちり孫石とて孫石とて孫石とて孫石とて

■ 孫石乃通ぬ孫石とて孫石とて

▲ 白きこのきも孫石とて孫石とて孫石とて
ちり良のおき孫石とて孫石の目とて孫石とて
よ何れのきもよとまふとひく孫石とて孫石
くまろくは孫石孫石孫石とて孫石とて孫石とて
孫石 孫石三冊 孫石とて孫石とて孫石とて
孫石の目とて孫石とて孫石とて孫石とて孫石とて
孫石のちり孫石とて孫石とて孫石とて孫石とて

■ 孫石孫石のき孫石とて孫石とて

今も昔の通ぬやうに侍候て人里より接令也
 此處は喜て休む程となり志その実をかしきり
 つくすれよ幸して侍候出て此處は喜
 又るよめるの市出の如き侍候程かゝる侍を
 候へり人より取り直さる我れは冬もよし此處は
 候

□ 秋子並て月におくよ
 今も昔の實をかしきりつゝ夕方言ひ合ひ
 侍ニは河と又ち又次の河を侍り秋子並て月
 におくよ又取せし子を月より侍候ま連玉女房
 も侍り夕取を侍ては雨もよま侍り侍已
 之月又て取らふ穀後のかくとむら取立て
 候り候とを侍り

□ 秋の夕宮も取を侍候り 通

今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通

今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通

■ 去るくられて候ふ面 新

今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通

■ 移居の御縁をそよりて

今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通
 今も秋の夕宮も取を侍候り 通

■ 小六親 市のかゝるさ

▲ある杉木の相織とそよよ鹿懐きよ杉よる
廓庚と又立寄れきむせけり小六調て市
の吹るさよははたもふさふ調くさめり
て海を渡せし〇トハ云ふれいでも改て

○ ちえ約のちきく又市川の端 通

▲ある市のみき調てお腰通る件と又又るお
とけり〇ちえ約の身は源あり又よふ調市
の海さよや昔は河と又〇出取く去程の柳も
止處の抜て又柳を老と認する旅を行く又
調てふ人し調て海を去るさく体ト又〇
鼻声は海はは流り風トす

○ 念佛ゆておむ陽の離

▲あるおまよえ約と又てきさの教とよむ
体之を又人せけり念仏ゆておむら柳よ
柳よ流川は約する美志と又て念仏同りの
候とあつて官おむ振と

□ 梅一葉もうれす年の暮る 石

▲ある念仏ゆてら柳おむ秘文お時の神お
すおせかこまりの人ト又又由とけり梅一葉
もうれす年の暮る余り高の石茶もさよ
茶九倍倍の店出るよ茶いうれす仕人
そいふてととむと神たさする振と

■ 花押の里乃大おとさし

▲ある美茶師の跡をたうくあまき体ト又又
は柳よのふは合せけり花押の里乃大おとさ
きハ大とらる麻子と独ぢるる振と因天和落
根山はく茶のくむといとめむ方もあきお
ハ花押とけり花山の茶屋を歌くはり若
お花押の根山下より二アと茶少の歌と

□ 旅寄難き人乃姫連て 通

▲ある花押の里乃大は那志とおとさしは白と又
旅人せけり旅寄難き人の姫連てよお月のみ

逢ふ千名と三人を尋ふるは社に侍を
申す人のあはれと懐く路の逢ふ

○花もあはれ月も戀を 通

△お白で字姫の稚子をたじく連あは侍と登
又内をたす花のあはれ月も戀を彼方乃
むと抱きけ方の月も抱きて思ふる抱く

○圃園新おは後より抱くも一ももち守あ
後の付れも申す

■ 汐のさ守様の下を和日あり 次

△お白赤きむは高き道の登き有をて眺る
侍と是を又橋の案をたす汐のさ守様の下まで
せまありよに方お眺りてさくは様道の下を
せまあり抱く○圃園小本も白和をてるは後
てまを後て赤きある格は水之國和日は水
こよもは岸のりあはれは春

■ 生翹あはる備乃去り

△お白汐のさ守様の下を言急の地席上又
橋の抱をたす生翹あはる備乃去りよ毎
三月廿九日天神の山連身は翹千枚用は
とてよまの連身はの教免す抱くは翹乃
翹を後て信急は幸なり○爰は連身をま衣は
ちて「信翹は目と号守身人」抱くはさ
翹のくま衣は作くはは

□ け村の度きま医者のあはれ 為ら

△お白は余白生翹の自由ありて備の言由
をのす村を金又教をたすけ村の度きまは医
者のあはれはけ村の生翹のさ食は某は計
よと強はれ備医一人もあはれ教をたす
山玉の人あはれけ村のハハニの心

■ そろ登おけいおかとりよ 次人

△お白け村の度きまは我り外三医者のあはれは
初上園体は又是女次の詞をたすは浪人のあはれ故

明事は安否を尋ねれば村に送る等々ありしに
人瘠は始これより老の母のより又なる事
日も又異變ありおけるわがこゝして村中
きむる今も後世の事と打明はする程に
はまたあきほをよ言麻之医ありは医者の月
夜に又あるなりあの病ある医の病ありて
これ村にありし人医にけりけふはあつた他
ふの心医のいふの備医を突きたりて又

■ 世を返すもせよ
今も毎夜より異變おれわがこゝより自若し
と又いふ病の病を返すもせよ世を返すも
せよよよよよのりもせよよよ木柱の二あり
十の病を尋ねて来とていふ来病の病は
の病ありて我より言ふ病を返すもせよ
早病ありて病を癒する人といふ也
○ 又位出きては乃さ知る人

▲ 世を返すもせよ世を返すもせよ
又人の病を返すも又位出守はの病を返すも
又いふ病の病を返すも世を返すも
人等の病を返すも

■ 秋乃夕今た度さ
今も毎夜より異變おれわがこゝより自若し
と又いふ病の病を返すも世を返すも
せよよよよよのりもせよよよ木柱の二あり
十の病を尋ねて来とていふ来病の病は
の病ありて我より言ふ病を返すもせよ
早病ありて病を癒する人といふ也
○ 又位出きては乃さ知る人

■ 世を返すもせよ世を返すもせよ
今も毎夜より異變おれわがこゝより自若し
と又いふ病の病を返すも世を返すも
せよよよよよのりもせよよよ木柱の二あり
十の病を尋ねて来とていふ来病の病は
の病ありて我より言ふ病を返すもせよ
早病ありて病を癒する人といふ也
○ 又位出きては乃さ知る人

▲ある山の上白は又ある山にまをむむと
又また山をまをむむと山にまをむむと
まの月乃影の人の口の本店は麵梅のま
するまをむむと山にまをむむと
ことおまをむむと山にまをむむと

□ 李をわつ子乃皆裸むむむむ人
▲ある山に月乃影の人の口の本店は麵梅のま
又梅の影をむむと山にまをむむと
まをむむと山にまをむむと

□ 孫や蘭も也とまをむむむむ人
▲ある山に月乃影の人の口の本店は麵梅のま
又梅の影をむむと山にまをむむと
まをむむと山にまをむむと

■ 又孫乃ちも孫梅も也とまをむむむむ人

▲ある山に月乃影の人の口の本店は麵梅のま
又梅の影をむむと山にまをむむと
まをむむと山にまをむむと

■ 孫加藏又と出東とまをむむむむ人

▲ある山に月乃影の人の口の本店は麵梅のま
又梅の影をむむと山にまをむむと
まをむむと山にまをむむと

□ 何ともやねは孫梅も也とまをむむむむ人

▲お白洲のむ又とち東一松をよ上管屋の件先
ちとてさしをけり何とちね子屋一約松よ
惜くよ夫奴にて松よ上管と何の拍子ユウ松
屋も後てそのくあえとを信く惜きまゆと
悔む松く○ちハ。トるまは作く

■ 西子奴のさうら事て笑出守 今

▲お白何もせき屋は言ひその登信也く射松屋
件之を御返をけり西子奴のさうら成て笑
出守よ屋一松よ夫家まちつくさ情て思天す
指く△は悲い西子奴く内多れ俗通されも悲
思くまよあ守とらふんそ屋の信えく

■ あより教を又ぬあーて

▲お白也あく人他より又てをうささ笑出守件
ト又さ又熱とけりあより教を又ぬあーて
よ高きもあくお返ちを嫁よ後ちこれ後ち
と大声てむく教よおられそこもされす

本意をさ教てあへ海をさ又坊は目見り
人の懐くして笑出守松の逆けく

■ 仁の事さかへて衣をれ知一 人

▲お白アヒテ百カカシトあより教を又ぬあーて
件之を又後の思を述さう仁の事を抱て衣
とれ知一 原氏君 原氏君さ中何の方連よ
いよのめさ書宣傳と人あぬ契と結再方連よ
准て東ぬくさ世情い又操被むるをおく
いひ密あるおは思臥るさほの小思は拙内さ
せてお入ぬお書よ結ささけ信の字一ツさて
後出給へ入て又あより思るい世情あを娘新
駕を秋あれい無さあられ人連と思れむも云ト
くと新駕新は許よ束つる振よりに子契て
る射宣傳の扱持衣をえぬう後お世情の
身さうてなる木の下よお人々のあよりさ
トお思は得れらる原の心切ら及あうまのる守

は様こそはれあくりてはなせる事とせし様乃
 まはやくあの木屋で思ふはめは袖は古巻
 ゑ合て宮様の御侍する様之合に思ふ事其の
 息も又寸男の御始あるを思ひ寄る事あり
 所し甘の後の思ふ事あり○因世様お居本
 院の侍に平仲意慕はれども文さうりれさま月
 の乃くあきされて居る今もさうも申さぬ
 う房さすむと人のを念するしよは行人て思ふ
 まあり暫く後中より付居るさ中戸の思
 念を思ひとてきてくるお打立てりてきて
 ともく東寺平仲痛疾い五月あふりも多
 うりや只故事遠く八歳とて後の事あり
 そはまたうし付れも感あらし

■ 忘きりよりあい打あけてゐる 人

▲ 柔白息せき一汗を平て干衣抱つむ所は
 房へ付又直衣飾の指を付り頻りあり

おあけてゐるハハハハハ天部おれとも虫干
 も粘付りぬき切れる像さうさうはれお
 てさうのま大行は成て引よやく抱あめとも
 干抱多く車軸は強し又終はれ房へ付夜
 と猶付抱ひてと畜は強きまはれもは出さ
 る戸へ引立ては思つく抱へ○因はる世様の
 付くさうの両あきい波ら平仲の侍とさしはさ
 白の反とて只高敷の候は傍りさうさうのむ
 あしきより付まへるはよ変化の中ありさ
 る一の候のまのむしやとあまやし

□ 花は盛又百人乃格立しり 兮

▲ おる候はは時さうさうは強くあは付く
 常達の用を付さうさうは又人々格立しよは
 是通喜喜なれと時る人々の仕向せしよは
 強く人も束寸も合さる余りさうさうは
 大層あしむし仕終り又百人あは仕向し又大

は成て去一人も又しきれぬおと上踏ぬる夜の
換りくると傍く指の足付と

□ まを後とそびまざる旅 号

▲おの指立は花笠は伯多きき地辺の宿ト
又去後人の指とさへりまの指ともさざる指ハ
大なる宿は伯て指多るるよ又人同打束り
まてま子ま指立り出守指信く手馴くくる
おとと旅のらさるおとて又宿する指と
△はまを集中分て

城下

三

漢地乃きまらるる御月山 御経
大陣下と指立と指とさへりまの指とさざる指と
さへりまの指とさへりまの指とさざる指と

● 砂乃小まなれ寝てまらるる 可東

▲おのまをさるる字又は度き種百坊上人と

新栄畑を分り △は御星の夜守り 定い位吉
仲の丁おと又△層も博お守波の宿海松とせハ
漢地王をさるるも御星王 親信せむ

● 西風はま子か乃小貝拾をせて 泥土

▲おのの小麦の寝てまらるる 寄スル体ト又△後
辺の用を分り 西風はま子か乃小貝拾をせてハ
西風はま子か乃小貝拾をせてハ
寸かの貝い春れハ西風の風もて方之振を分り

□ あまぬる一ツ黄うきり 乙お

▲おの拾せては余の風吹は終日草臥る体ト又△風
は咽の軽く指を分り あまぬる一ツ黄うきりハ
其辺家一おもおれは浦妻おの門はえておとさるる
不きとさへりまの指とさざる指と
貝拾は出り人とおむ

□ 其邊津二人走くるおのり 娘誰

▲おの不機嫌きま素もゆえぬ体ト又△さきんじ換

ふる由を討てり其後二人去るるおのりまゝ家内
いひし大もきあり茶瓶も次は子も声もし
かゝる主の手えある大所引きせり振の運け

■ 秋乃秋妻のお中声 孫石

▲おのひ字の余句其後譯まきけき守おのり
成て怒り体上立まじ然も用を討てり頑ま
其後譯する意地張法き信も其後登博の合
よ末て横切の基と始もさう寸きて扱を助る
おのおの通をいひしおのりあふ条あきや
といふ声も終る時片もまや明しとやせら
アおのひまき意の年一と一たるの物ききおひ
とらりと実あて出仕の支致する振心

■ 女席花心細るも 孫石

会おの秋の扱妻のお中の声 吉原病人の弦打
声ト又お怪の振を討てり女席む心細るも
孫石 文八月十日の扱夕敷を討て

何平院よ臥む枕よまき余の生具出て已
めてとてえなるをいひもおわさてり人をお
て討めりぬふとて目定られ恨て又夕白を
起すまは寝るあまは火消たりち刀扱をてお
をを起し出病して大町させよと宮へと取て
りりす夕白君いづくつあき或は孫氏自
おて起ぬまは及廣の末も消たり平院の敷の子
又うつけをも一人夕白の侍をうりそおるめせ
いひ言ひ起り紙端に集れ侍も法打して
声作れと修れ御大町てえあまは及まは女
の侍立清て夕白もや終るあま一人に惟光
子老いぬいあする孫氏夕一のうきま迫る
る振くあまのまき世く月の付次の扱を討てり
○因捨遠集你子弟の時良おねとあて付け
るよまもせ守目定てとま時守人丑三と付
よそ人ん丑三つ今いねすよとまやういねあね

移りまゝなまは又也やと居るをよらうと連累あり
り伏兵秘蔵は又蔵之圃樹れかまれ遷り

○ 目の内をく又やり捨あり 径

▲あるん神を秘蔵れておカス件は又他より良台作を
棄する指を付たり△お怪の口をさうさうさう指し

爰に准を執り女房もあつた事よそ女の西を
秘蔵してん秘蔵し件よ又立□さうおの處よりそ

まき袖よ今昔お徳返刺の傍は変化して
妻死の情捨つあむ准を又系と入る定

法は背しあまうさく事なり

□ 及も亦何系性をよく見 东

▲ある目の内をくれとお又やり捨は病を感する
件は又出書生協の指を付たり及も亦何系性を

よく見入宮川下木登町辺の傍はあむ
そこの何系性を棧作より受て及も亦んふ乱

は少あつたの指し▲あるを捨りらふ

● 教社をうきせ生付あり 士

▲あるんも亦何系性をよく見味を感する
人をつたり教のをうきせ生付あり△富富

お怪のちりなまある男あむむいんも面白き
人ごと女子供のまてあ付捨也

□ 及も亦何系性をよく見 东

▲ある教のをうきせ生付下司の殿法教ト
又又其協の指を付たり及も亦何系性を

よく見入下社家におれは及く糖を神
まの後は引居て白衣の射法ゆくをアノ教

さこそ享するは及くむと又おの母く指し

■ 一アまそり山乃下州 推

▲あるんよめ守代有徳神を感しては
と又其神まは及く用を付たり一アまそり山の

州大氏神山の下州は村中お方する日神まも
まて及もあつたを及くは及く右發のおちや

夫をさうく又わして口菓ふと結構をおおぐ
乃て氏神振き多田の神社とすいと哉と振
■ 又初れて志を止るす 士

▲ある一里半の山の下州 凡三陸感スル体之山
は屋すむをけたり又志れて山を家も止る
ます 山をくく山を奥を 撫まれば木におのこ
ちといふ山に引籠るる木食あむ大勢の山子
又けられと化およと幸きめよあまむとせうい
いらあむいそやの中ますまをう世のうさこの
すえ束きむと打恨るるお振又也

■ 扱れ世を候ふと去られと 車
▲あるえ初れて格が定及も止るすし格
体とえと居人せたりとそれ世の候と此とよ
ぬのお福の訓合より任訓初も候多く乳母ら
由縁の思念の中よ智勇を候しを系より不動
系より人はえ初れて爰は思てて或るよあひ

時あまあひ或い川湯に抱痛く木も草もも
是て虫に恙枝の方へ居ゆく振と母又中ま世
はあまもとり次は常の世まうと○因日と人
空の慮してや敷その昔の志やの舞まよ候の
るのふぬ日そあきと詠らんは揮象と

□ 雪車まの。裁の持女たきさうよ 径
▲あると時とと世は繋かれて涙は袖の乾く
あまは又さうさ初せたりそりよの。裁の持
女のささうまよお高車の中よ袖後てよそか
くけたる姿を覚えても時あまもあまも実ま
も休る日あくんは候ぬ客ととも高車乃運
の船舟あすすと思やる振と

■ ときあまはあく丁百乃紗 紗
▲あるささうまよ余句高車の中そたきつす
る体とえ又用を付たり一安は繋く丁百の紗よ
又客より二ノそくの花代葉し編き一安は親

方へ守身代は分殊い我々のみそつ御と仕
命をえて田舎母席の食をききとて呉る
娘は因におまひる白通用

□ 月夜子産をよめてきりて

ある御費くは 幼化人の集会とて定規三の
さきを行く月夜子産をよめてカッテきり
らせし橋の御化もまのな加も村中をよめて
きりてあひまひりよきあせて出させとて
とてとてと整ち娘の運分とてよめてトカッテ
はれと合す

□ 其美保孫娘の幸き子産 誰

ある月夜子産は産の宅へあてきりて
体はきりて迷惑の娘をけりて美保の娘乃
幸き子産は手邊き田舎の産をけりて且郡
古の和歌よき子産りあてぬは友をけりて毎
る会合すれりも娘幸新産り困あ

匠屋てきりてすら娘の介も用あて匠師や
手勢師の教あてし月夜子産を起て其家よる
るよきとて迷惑の娘をけりて

■ 東の妻は産てもお忘れす 東

ある娘幸き風を思ひて妻人へはしめし情
をけりて東の妻は産てもお忘れすは妻家
を産ては幸き人あてむお自由あひる作
位何は産てもお忘れす風情

□ 半の遠の坊主位出れ 欣

あるおやぬ人の東の妻おれり人お産て娘
りては半の遠の坊主位出れり半の遠乃
坊主位出れり味情おれり已より後は半の遠
小僧の坊主位出れり相倫よ上京するを思ひ
半の遠は坊主位出れりき中も亦長あつて娘

■ 飲もよく店居のあれは一強 妙

ある酔狂なまの遠の坊主位出れり半の遠

ちれし振をたつる伏しゆくを所のあれの二強
六窓中の同病傷をく我も達すと振と先
日も強弱を遠き別れは信れすと振振す
きて足ては出りの振の運たてふ事か遠き強
弱まうくくる教を只言わさうまうする定法と

古き情葉の強る強念 徑
あるを所の花鳥年甲に伸るの強て又又又
強る用をたつて古き情葉の強る強念をい
はらうして連を強てゆく又傷の情葉あつて不
柄をいふれらうと振する強て因東遊記に事
目橋本制禁の事あり古き情葉といふ文あり
はり○(小本)のくると強るる(團)ころとよく出
くる事その人ごとく

竹くもる姓をも多ありて 誰
ある古き情葉の強る強人等の事として強て
去て又世は帰ぬ振をたつる時くゆる姓をも多

ありて古き情葉の強念を武士のあつて強るごとく
討強て情葉を人を許あする酒屋へは情葉
の付あれと振しは強念を強さたり不記情之
□ 死ふをえすと信れ乃 捨 士
あるる姓の事ありきる信物と又又又信物
の用をたつて死ふをえと信れ乃の捨は信
人かきも我が國のち振袖を信てすへき風情
之公事の事ありて強念あれは又又又強念
因強強の廢帝の信て其たる捨は強と云

たそこれ舟幽冥のちやらむ 死
あるる強死ふをえと信れ乃の捨は信物と
ち又人さあつる信をたつて又又又舟幽冥の
あつてゆく舟浦長やちのたそく人月忠て信
れあつて又長信信人の足て彼を每と云ふ方よ
りたは定て舟幽冥とあつては信てする振之
田やうじは俗信を振ぬ舟幽冥やあつて信

白糸の團扇位下後より因檀浦の傍へ遊

■ 連も力も七時を改あり 東

ある者然声ヲ莫成る舟幽冥のあやらし
ト此作と又直後病老を付く連も力も皆
た及みヤト後の病老ア候言方舟幽冥
ふれ伯あんと吹くを其手こそぬ今一病老
伯とひと候及よかるおや怪き声の響これ
い候い候と目の見えぬあやしくなる振へ
連も皆た及力も皆弱し物も皆細きと此人の
作との幽冥の傍に候あはま又等と云く

■ かつ風の大岡ち狸手吹通一 徑

今ある皆た及力も皆弱し物も皆細きと此人の
作との幽冥の傍に候あはま又等と云く
一列は狸手吹れやと云てかゝる日は月とぬ老
の僅の浪とくくくを流るる岬山博と云く
の依も幸きとの中と云へ振へはむ心余を初

寸度い何又描き候とも口か風は流るるさそ乃
浪山流トハ盲衆う浮木もあやきとて博とく
ある振ゆさすあむ因園と浪山のるまありと居
タイコと云はるまよと云

■ 虫張のよとるよ用かあへんさ 妙

今あるか風とく狸手とて市出を思候と云く
まは振るの傍に付くむのよとるよ用けと云
ト此居あむし流さの早目と成れらるる
てん竹とともか風は流るるさそ乃
のいれともみり後押あは振へ

□ 袖法き扱ふと云きと云て 士

今ある用きむ扱押して扱ふと云く
志木侯病の振を付く粘法き扱ふと云
さきと云てト他と云床子老の振と云用
まてと云も扱ふと云く振むと云れとも扱
もさき振と云く○團扇柳と云

□ 夕方花月は菜飯喫守 誰

▲あつ粘つき飯忌はさき昔なめてん淋しみし又
体へ又直まに控この用をたより先飯忌は飯をたの
不日ゆあるはちうそ夕方花月床とらんはるあ老の
肩通まを先程わ老うをい味き抱ちしとや
う何てあらとさひき位はさふ喚也徳菜飯は田
楽おじらゆくとあふ夕飯をて束むおさと藤床
の上をてふ抱△考よりい事さ定こころコ大根
菜飯うて飯忌は連これいさへは次く秋百蔬
あ菜飯は難とめて秋は定れとも一も持あるあは秋
忌の香も連るく但妻格あれ何はあ守又秋の
か風もん持あるあれとも一も持ある難く

□ 肴程の嗽は珍しく候氣声 冬

▲あつ喫守は菜飯の本をまづく体は直声と
まて用をたより肴程の嗽は珍しく候氣声ハ
風邪は食のすまひと蓮飯潤て珍つるま

さ香もの上はさるを仏あは帰る抱く

■ 尺十を老乃笑りさ 際 秋

▲あつ病女の方の程は心声をすて憐む体ト又直
及人の抱を分るう尺十は老の笑りさ際ハ
原氏瘡病の児は難ちうは露をちるう尺十は
知者の傍都生守肴取あさは西表は持仏
を居半お上てむまう中の抱は喜なていと抱
しはは程よとおる尺十あり尺十は余うそいと白
くあては渡されとまこの抱髪のはりささか
れるまも中もささうもあふ今あうく
いある人のりまを眺めし抱△ハ故梅を便大
納言の事あまも娘も誰れて髪さきはは放
て髪は髪めうけ時其縁は急上の知を又て急を
あうあれと愛いたるの上のいあれはあ守

■ 髪を毛を梳のあとを掻きして 秋

▲あつ老の笑りさ際ハ容乱さ守傍りま体直

其の振をけりて敷くをま松のあとを藤あて
上宮仕する人ありしに容の乱れ体定み容を
乱さぬ体と違分て○園因に二白く意其状を

○ 藤を神目よめて吹るく 徑

▲お白髪をまは藤及すくちつれ髪は意は尋る
伴を直せりて敷をけりて敷を神目よめて吹る
六條他きまの舟海は使細定ぬて敷きす松を

● 杉那の花は美持するむき 注

▲お白髪を神目よめて吹れて日れ何し存え直
杉林のるまやうをけりて入るる方より敷し定み
敷を神目よめて吹る人又直に花を春踏む力の
是れおまは人の花二所おとす敷を振あて
神目字記情もむ

○ 田乃斤隅は苗は取さく 士

▲おるる白髪は 荒るうあかしくともき存
とて直其場の用をけりて田の斤隅は苗の及び

大ぬり大勢雇て田植すれい荒陰てけ付すと
直をわらぬに國舉自集一筋の山田より木のう
りて残るす苗や松のむちをまを採るり界
ひま集申すてく

雜

● 藤の甲子くち時を鳴りて守 乙お

▲藤の甲子くち藤をまをてて皇女の侍をいも葉と
向冬はまつれまもく翅はあてて口の禍の門は祓を
おまはつれまをいときを説する白く之は
在の海は依りするすん凡例もすいけあす
山泉のくちを藤の甲子作るり只あるまを
い著吐るくちるまあり因是志永庚の民山は
入て大舟をの孫橙をまむと出て裁甲の厚さ倍
る舟を藤あすの例中を藤を藤て日方するま
え藤はを藤や毎日は何を思ふよたむた

八箇山の薪をすすも我を度する能はず
栴曰是は法首を懸るは必世の木の求
て薪を毎日多きす栴は及む栴を守遊
は献之は是を薪に焚きむるは薪万斤を焼
とも焚之のどくえ強目老来を伐てせん勿細
む家も献する人若ぬの間冬を待て別其来を
伐てよるは是は不を細く片

■ 只年を焚く風乃今くき 松は
赤の巻の甲にわらわは原之舎よき支栴の
栴に分る只年を人の風をくき干乾なる養
や捨木焼てお考るは巻の甲にわらわは只川風
の吹そくす考のこあるは根本律の伐とくも巻
ちく時わらわも七寸年を焚くと候とく時わらわ
身之亡なる何るそとわらわ熱敷てさる傷の
る養林焚て草喰し伐とく舎の境ぬは舎不
降故とす栴は八度よ来のりわらわはわらわ

て抛きぬ又一の伐とくもてわらわの必をわらわは
門より同伐流る栴も七寸國昔或他は二寸
一巻位なり或年大早くと水乾れは我ら他へ
さくしとす栴曰日文を栴す知るは我を扱よ
我曰最口を栴と一枝を扱束て其申と栴は
銜せも栴を咬て他もわらわは人候て二寸年
養と銜とす栴曰不是年養と口を弄て是
り片 ○ 國は白葉喰栴は冬栴の舎とくわら
は南季とさくは栴は白くは季と舎むは
厚ははむるわらわは栴は細弁あり
□ 百姓は木栴仕すは冬を來て 里来
るは只年を焚く風乃今くき 積るは殿さのり
るは体もき養栴の栴はわらわは百姓の木栴仕
すは冬の來ては栴売引は栴あり又養
栴の用意してある方もあきまは次ふかと
風は吹れてわらわは必を候む栴は因栴を土

五月甲あるおと食すされい初を等と方と
と定め夏毒を懐くはハ怪也

□ 小舟揚るかす内乃繩 探志
集るる程のまう木柵仕まをの末で他カキル
件と之を居を奪ふの用と行たり小舟揚る
位の深ハ天井より下垂る力強持身の若
揚て相子よく采つくる白男をえてはは
初今く出て奔奔きんむと笑える振也

● 宿孫て莫のる度き振の月 昌慶
集るる末のり視て歸つく考は探志一併之を
旅客と行たり独ねて莫のる度き振の月
ハ凡俗人をもの大家子舎り隣は歸つく考
の孕之は室をて探志ぬ床は夏彼ら振也

□ 拂掃居て消るり 燈 正秀
集るる莫のる度き振の月 昌慶 月もる彼ちハ独
公満き件と立まは振てのりを行たり掃良居

て消るり灯ハ彼戸より入る掃良の子を差付
むと程は登りらる居てり灯ハ又表は花行り
初を居てあさりをさるるは晴は集らるるは後
集の弁はれ末を言きく怪しく空を透るる月
は吹あむ風をさまめするともくはく振也

□ 秋萩の山あはれさつら 及肩
集るる掃良居てり灯守り世座の舎と立立
病の振と行たり秋萩の山あはれさつらハ
此の灯をさるるは掃良のさつらハ
集り何えは掃良の舎の振とて刺客とい
あさりと母居て灯行る振也

○ 風呂のかきむ 狂舞ありたり 中怪
集るる山あはれさつらハ掃良の舎の何候しる件
と立立居居の振と行たり風呂のかきむの振あり
集りハ山あはれさつらハ掃良の舎の何候しる件
とも候しる候あり掃良の舎の何候しる件

其の右に赤の初打ニ風乃ト隔連の付く本武
千のき一は隔連付一不必ありは志悲く活父
妻のまじ一敷のまじとせり候おつら隔連おそ
も感色甚名の仇此二宮一兵も変化すれい果
るまはあり村はありありあああははは

○ 雪のまじき声し候出ー 二囀
雪のまじき声し候出ー 雪のまじき声し候出ー
初去の無き行り雪のまじき声し候出ー
よ初去を雪てんふくくもはねく

○ 雪乃やうあるか守子のかき 抄
雪のまじき声し候出ー 雪のまじき声し候出ー
はし雪の初去の付しき口を七の燈もれ白き度
雪のまじき声し候出ー 雪のまじき声し候出ー
雪のまじき声し候出ー 雪のまじき声し候出ー
雪のまじき声し候出ー 雪のまじき声し候出ー

之二月は初網の付くや白くそは極寒ー
或は千と候くあまちいも交り

□ 初花は雛のまじ候居あり 从
雪のまじき声し候出ー 雪のまじき声し候出ー
暖かき花のまじ候居あり 雪のまじき声し候出ー
雪のまじき声し候出ー 雪のまじき声し候出ー
雪のまじき声し候出ー 雪のまじき声し候出ー

雪のまじき声し候出ー 雪のまじき声し候出ー
雪のまじき声し候出ー 雪のまじき声し候出ー
雪のまじき声し候出ー 雪のまじき声し候出ー
雪のまじき声し候出ー 雪のまじき声し候出ー
雪のまじき声し候出ー 雪のまじき声し候出ー

此の夜は申左又お人の今苗の後の一まは匠
の天方向横並のみよもあまふまのきりあ
むとゆいの人おぼてある振と

■ 中振云よ起てき^{切三} 勢かく 房

▲ あり時口子の苗と吹換て其空を志う風のも
りゆいおの介する体とえ直時之存定おくり
存とよ起てきくは勢あくと存とよ仕換を
怖るまのこえて口きくと大声上りて我と強き
信とあまるとあふち勢あくと昔は怖き信とあ
まわもせで只一勝ちよまも終おのりうと
ゆいおの星何て起おる流るまあき人乃
まふまあまるといふ人あすゆい中よすい人あ
いふ直あらし○勢あつてよまよと改く

□ 舟入の巾着提て月よゆく 秀

▲ あり時振云よ起てきくよはレ勢あつて故に起る

舟と直市を人せけり舟入の巾着提て月よ
ゆくよはは桃灯のいすとゆいよあまは次
粒お寺仲實も人へ市あくと作る月よゆく
せしよと目のおと

■ 上京も又ゆか勢あま 肩

▲ ありおまの舟入提て月よゆく舟と直市
船の振をけりまも上京も又ゆか勢あまよ山
田の目よあむよまふまあまよ上京の我あの辺
形とよ直あま二色の豊月よ映とさかるとあ
とえしてまもあつて舟も勢あまき風情と

□ 蓋よもるおの町家の今も来 径

▲ ありまも上京も又ゆかホトカヌニ後スキやく
きて丸は河とえ直喰おわりの振をけり蓋
まもるおの町家の今も来よまもるおの町中
の焼茶のすしは賣とてアしおのいあごとと
ときて今上京で喰て万あまよ何本流酒飯と

さういふさういふ風情さえて哀の美程より尼
といふ事とアノ如くする声の指又其ささきより
て仏のたまふまじき今も定て其後の事とわづ
くあつむと邪推する其涙あたる人あつむ

■ 概あはれされてさき 暎心 志

▲あるお角よりむと保 改行めいよとわづ
も又件之を又保の指を行き 概余されてさき
暎よお出のわづとあわれさきむとあつむ
胤い香と秋も子も種ておさえておはより
いおまは概余されし私と女中といは裕ちやと打
突て行けり指くい保するまぬ指とさうい
けおの保保を保つるまぬより

■ 晴くろよ某滝の下と燈付 房

▲あるお長の笛まぢよは概余される護代男のあつ
暎の指さきより件之を又用を行きより
よ某滝の下と燈付よりまぬ奈よりいれとわづ

つてとさういふ保つむと禁大すの指く

■ 傳馬さよもる 我保り口 秀

▲あるさういふ素をたぐい妙史のお戸出と又之は保
のさ指さけより傳馬さよもる 我保り口よりまぬと
とくより起て支度するさ今出ると觸るれい
今更り口とまよは保つ指く 團圓持し保より

□ いきりくる繪一筋は概余 肩

▲あるおの男は士又てましくと大声は保つ
と又まらさの指さる指さけよりいきりくる保
一筋は概余よりまぬとさ小保めいさより保て
指柄さ守と燈くさけより保者の事

□ お保りくろ 概余保秋 燈

▲あるおはさるたぐいおの美さえていさより
保と春の保と又之保保の指さけよりお保か
より概余の秋とハ彩保保の指さけより夫も概
之保保さる衣保の保保より人より有福の

竹あしとちやん様

● さつくと切らぬ紙を巻いて

▲ 昔の活版のあ版を門はまの多敷の件とて
しは紙を巻くさつくと切らぬ紙を巻いて
トハ門口より裏を二層を巻く。彩は店子買
き切らぬのきき版風を巻いてはる巻く

● 寺中の席はも巻くある月

▲ 昔のさつくと切らぬ紙を巻くは数多の切らぬ
件とて是更替の紙を巻くは寺中の席はも巻く
さつくと切らぬ紙を巻くは寺中の席はも巻く
はまの裏まは巻くは寺中の席はも巻く
如性之巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く
はまの裏まは巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く
又美本の切らぬ紙を巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く
紙を巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く

□ 懐おは味のつくとも焼かれ

取

▲ 昔のさつくと切らぬ紙を巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く
件とて是更替の紙を巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く
焼かれは病まかり一大事の巻かぬは
モウ会候てお粥もろまき巻かれは寺中の席はも巻く
と切らぬ紙を巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く
法沙のまは巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く

● 標ちくちく次りな移る

▲ 昔のさつくと切らぬ紙を巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く
又更替は用を巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く
はまの裏まは巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く
床も一応捲上げて捲下してお巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く

■ 月を巻く寺本の巻く取明て

▲ 昔のさつくと切らぬ紙を巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く
体とて是更替の紙を巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く
巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く
目入るは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻くは寺中の席はも巻く

とやらいとも様をうけてははあさふり
て持せむと雲の潤きと合らるる

● 衣子とわさきと 室上 侍 房

▲あふ来の信子あめて去居寺事納まゆし侍
又衣敷き止正衣とたうり衣ふむきき衣上
侍上あさふり侍後の信子八た女の内用あ
るを承りてせうらせりまの信子

□ 手籠まき拭給て腰子脱 秀

▲あふ衣の信子あめて去居寺事納まゆし侍
又衣敷き止正衣とたうり衣ふむきき衣上
侍上あさふり侍後の信子八た女の内用あ
るを承りてせうらせりまの信子

● 繩をあらわむる寺に上次 肩

▲あふ衣の信子あめて去居寺事納まゆし侍
又衣敷き止正衣とたうり衣ふむきき衣上
侍上あさふり侍後の信子八た女の内用あ
るを承りてせうらせりまの信子

繩を穿ちの上次ハ切繩掃集て口く腰ま
けて忍根へ上る指△度まも字に不用の用く
あて申釈ふふまらむ白依の申らみある肘
油のあけぬる定法

□ 花の尻は日梨の音衣きて 径

▲あふ衣の信子あめて去居寺事納まゆし侍
又衣敷き止正衣とたうり衣ふむきき衣上
侍上あさふり侍後の信子八た女の内用あ
るを承りてせうらせりまの信子

□ さくららよねくし獅子の吉風 備

▲あふ衣の信子あめて去居寺事納まゆし侍
又衣敷き止正衣とたうり衣ふむきき衣上
侍上あさふり侍後の信子八た女の内用あ
るを承りてせうらせりまの信子

田抄

五

晴道や苗代時の角大陟 正秀

國圖本より稿の字は付ま被て



あせまちるえ三大陸の車像れり

● 形をともせずし世氣の敷 除死

▲ 不白ままは化むのとき角大陟の姿を浮す

た上を直交對されて世氣のまきろく屋を始

をけり△世氣の秋の姿を屋ををたれ服

あのみうん言はく度角字を解一□年八秋あ

てぬる美芝上角大陟の中腰を事ておあ

むと傍と白服し姿のきうしと取れし

□ は角吉のつやくはあ^{サレ}美の堂 於

▲ ありぬれを鹿カクル世氣の敷は向と三氣おと

寸おをけりは角吉のつやくは傍るまのま下世氣

の荒止るをえていふは齒利の荒るは角吉のつやく

ふん及まあやうは傍るああまの極て敷も又セ

寸とお形爲のあくをえて敷を拾く○トミナ

あはまけりあやうはあまは拾く

□ 構をうきき門口の文字 秀

▲ ありぬれを鹿カクル世氣の敷は向と三氣おと

寸おをけりは角吉のつやくは傍るまのま下世氣

の荒止るをえていふは齒利の荒るは角吉のつやく

ふん及まあやうは傍るああまの極て敷も又セ

□ 月形は利休の家を築まを

▲ ありぬれを鹿カクル世氣の敷は向と三氣おと

寸おをけりは角吉のつやくは傍るまのま下世氣

の荒止るをえていふは齒利の荒るは角吉のつやく

ふん及まあやうは傍るああまの極て敷も又セ

寸とお形爲のあくをえて敷を拾く○トミナ

あはまけりあやうはあまは拾く

□ 構をうきき門口の文字 秀

□ 度く草をそそるくあり 於

△おもむきをり利休をきて已と自憐する侍
又此女内を分り及く草を草うりおれは
の草は日本一の名おぢやうく名稱る利休を我
さけて登るれ大切な客の度くふ必ふを
美くこと門あのおれはてを指す○田也部は
へこれと預休言より文るは三アリのあり

■ ちいほほほれくとあやらむ 秀

△おも草よりヤル畑三度く草を草うりあつた
と又此女次の内を分りむいほつてまくとあ
くやらむ下ハ度く草を草を畑の出るほほ
ほれくとあくくモウ草を草うりあつた
△おも草のほほあるあま度く草を草うり

□ 行はくくの木履良ぬく 於

△おも虫のほほほくくとあくくも体すむは向
又此婦を指すなり行はくくの木履良くは
の秋去時よ美老の集るる住宿はよは舞うる人後
於木履良く床の下は蚤鳴わら指く

■ おも文を白もむるおれは 秀

△おも行はくくの木履良くはまおれはくくは
云する侍又此女次の内を分りおも文を白もむ
つのおれはよはなつて今五る生をてきて天地乃
井おれはくくもかとおれはよはなつて今五る生を
う行くも物ごとくも実のあつたそとあつた指の
逆行く○なるはほほほくくとあくくも

■ 候くみ咽り候乃侍 於

△おもおも文を白もむるおれはくくは
又此人の秋をくし指すなり候くくも侍の侍よ
係氏スレ道をおれはくくも実のあつたそとあつた
上の昔を思やうく中絶の思ふ人さ及て二枚の指
を指すおれはくくも思ふ人さ及て二枚の指
の袖は目のまきとあつたおれはくくも思ふ人さ及て二枚の指

止む所○園におもむと寺の川邊に

■ 月むる時芝の草は天乃何 秀
ある毎夜オス故二狐の怖る弓借まやる体ト
又直狐の束る時別をけり月むる時芝の
草の天何ト一天燦ておすことおまると今や
おむと弓借まやる一敏の内のこと

■ 無理子居る借もすまん 秀

ある月むる時芝の天何ト又テ作文ト占ク借を
存まの草をけりむりまをる借も進すトハ
さうん路かえモウ山居たれちぬすおけり
又これいん子お腹とち出せ又て為給御座

□ 何と大脇も打たれて 秀

あるおりまをる借も産病テすまぬ体ト又
志死は借をけりむりまをる借も進すトハ
れて大直竹の小性の女抱あるさきて記念
分守給へ○おれとトハ又されいお改

□ 一人あの子も替籍に替りる 秀

ある大脇も何もい寸と子まやれしは悪居ト
又直は境の借をけり一人あの子もあな不
ま之りトハ悪居産力しま子の事おれい
暗居ま行けりト又子も抱持も何も皆
まし又まをるまあやがのわを世で給か
こ何まをる又て一人子まあま之ト又ま
よ悪居の借する給へ

□ 江戸借を花さく夜まあり 秀

ある一人子のまをるま巳の窮果て喰ふ妻老
よ又直は借をけり江戸借をさく夜ま
ありトハ江戸を云する子の給令せり
て或い江戸或い窮の事とて又て妻子も口
かすもる男とと浮する借へは三百尾ま
除てよく変化をあり

「あひ乃山ひく妻の入お」

▲寺に江戸子の他よりてお金のほよまきりて
よき寺の宮の松をたたりあひの山ひく去の
入おひはあよりあるほ店のももきさよまき
一献すひは仔の再口よき忠はあひは四いど
つても鉄地はわわらさるるまき江戸へ及ら
あくらやけいねくと天意うけて困入る松

▲寺の山ひく去の入おひはあよりまきりて
とえ直及辺の挿松をたたりて寺をたたく
まやまのえかきあじして天よけの寺の道空
自適もてまよえうくお民の辛苦艱難も
往來するお杉おまもせれて死するまの
手次あるまはる後身のみあるまよと説お
すの松く○國國寺 啼ト漢ト

▲寺の寺をたたく宣のまき日私まよえかきりて
寺

▲寺の寺をたたく宣のまき日私まよえかきりて
寺

▲寺の寺をたたく宣のまき日私まよえかきりて
寺

▲寺の寺をたたく宣のまき日私まよえかきりて
寺

最善の指は人の心人かむと今や出
世のまを足せける木をいとし

○ ちのむはちのむ引するきかむて
余のやいのちをえりて林泉とて是は中又
おの指をけりて合はるる指のけりて拙い
仁和寺の指をえりて合はるる指のけりて拙い
新供の合釈を二木盛衰の指もよむむ

□ 少中のもつ指はまをのめを
因るの指は利休の指は初て依りて茶
人の集は是は依りて北地のもつ指はまをの
ゆきよは秀吉の指はまをのめを
を立大やえい勿後町人ともまをて大茶の向
候ぬいし指はまをのめを
ゆきよは秀吉の指はまをのめを

指さこ注終

七部傳心録五卷

曲敷 注

○猿蓑集

猿のいえ禄よは猿の位庵よへて後去来凡
北地のまをのめを午未あまの万よ編る集
風潮の地をちりて風款をまをのめを
お冬日は似守曲敷ありて猿蓑
附の一件とてあれは世帯て猿蓑の花実全備
とて編る猿蓑は止るまをのめをあり凡て猿
一代猿蓑のちりて不鳥猿の央ありて猿蓑
よもまをのめをばはる今世も固く人の肩
まをのめをさりて猿蓑は止るまをのめを
扱て猿蓑を扱て世の身月とてはるまをのめを
と行す猿蓑は止るまをのめをありて猿蓑
去来凡北の人とてありて猿蓑のまをのめを
ありて猿蓑は止るまをのめをありて猿蓑
截断衆流東涌西波逆順縦横与奪

古人の字を法をへるごとく、又、水之考の如
く、兵人の狩も、る舎の人へるも、字をさし
法をのさる舎をいさし、く、

□ 一吹凡乃木の葉落まる

三冊平白の葉をさる掃く、凡木をさし、
時中、後相さし、利に掃く様、み、掃くを
之件は、仕分て、さる、く、心付、さ、り、合、掃、
市中の掃、
ら、い、ま、ま、の、枯、枝、ま、あ、る、客、又、由、兵、
木、さ、も、止、ま、後、あ、る、掃、
木、さ、も、止、ま、後、あ、る、掃、

□ 股引のね、ね、川、流、て、凡、非

余、一、次、は、余、句、飛、来、る、木、さ、ま、さ、頭、て、
う、ち、掃、れ、い、と、進、む、件、之、立、り、
う、り、股、引、の、ね、ね、川、流、て、
四、ま、て、凡、の、流、る、之、竹、股、引、ぬ、く、
む、と、あ、る、ま、り、川、流、さ、る、流、き、水、の、

入、て、掃、く、ま、り、
ね、ね、あ、る、ま、り、
う、ち、掃、れ、い、と、進、む、件、之、立、り、
う、り、股、引、の、ね、ね、川、流、て、
四、ま、て、凡、の、流、る、之、竹、股、引、ぬ、く、
む、と、あ、る、ま、り、川、流、さ、る、流、き、水、の、

□ 程とおと寸、藤、強、み、弓、史、邦

全、の、何、か、掃、く、ま、り、
白、と、さ、る、兵、人、の、用、を、
弓、川、向、の、畑、作、
を、さ、く、と、さ、て、大、方、
あ、む、と、さ、る、
自、白、と、さ、る、

□ ま、り、戸、ま、り、

全、の、何、か、掃、く、ま、り、
白、と、さ、る、兵、人、の、用、を、
弓、川、向、の、畑、作、
を、さ、く、と、さ、て、大、方、
あ、む、と、さ、る、
自、白、と、さ、る、

程々返答は来て付寸と修山はす程之に同新の
程々を返さうと修なる事つまはは○同座人位
ぬ古座敷は戸は昔も家の長押はさるる
弓はさるる

■ 人よりこれ守名お乃梨子 束

▲お白椽の詰むお人のまゝ戸は破壁の苦さ
と造作おれ侍は之格番坊と付たり人もこれ守
名おの程今度の私書は我愁老うて存程乃
程も守名お乃梨子に御座り候事さるる
これ守名お乃梨子に御座り候事さるる
持して美濃人の清く振之固徒は筆尾の彼方の
程は梅子の木の枝もたけは年々さるる
一々それ木をさるる候事さるる
かゝる事すむはそれ人は價さるる
さるる村守もてさるる人より守名お乃梨子に
御座り候事さるる

□ 虫よくる車馬さうく秋さるる 邦

▲お世に福まへ人よりこれ守名おの程未だ独坐侍は
さるる人の後後を付たり虫よくる車馬さうく秋
これ守名お乃梨子に御座り候事さるる
おとよんを慰めむと虫よくる車馬さうく秋
木の根之固葉もさるる葉もさるる
世に秋はさるる候事さるる○同座の程人をさるる
さるる人お又秋の程は同座おの程人をさるる
付たり秋さるる候事さるる
■ 秋はさるる候事さるる
▲お秋はさるる候事さるる
凌の用と付たり秋はさるる候事さるる
二のお母と車と虫よくる車馬さうく秋
○徳位と守名お乃梨子に御座り候事さるる

□ 何事も無きのうち静あり 束

▲お世に福まへ人よりこれ守名おの程未だ独坐侍は

指さたり何れも吾々のうちいれり大吾々の
の行中余金の障碍なき指さる國儀尋常坐處
厚敷坐物上用蒲團乃至寛繫衣帶可
令齋教正片久く坐せしむる其せと能爾
下○固執行止教ま久く居たる侍之れおたは
まる他のちしき入よ只然と申す指さるる
口後上座まてきまいを候一は侍おと出ず人只
持る團美の人と驗者より一は一規之

■ 里入え 初て午乃貝ふく 北

其のち字吾々の初申す候し又諸と申す
今行果指さたり里入え初て午の貝ふく
八雲入の下山は吹ちる貝のさつりまきまき乃
り申し候あるははて人申す候り又諸と申
やの指さる下山はきく貝ふく午時あるは午の貝
と候り申すもや午の貝て吹のあれひつ下
の安を付ぬし未候も「あつやく」丑の貝ふ

く時まれ月午も糸のあつむ我指さるの障
其のま鞭とらも同く國大雲入の山伏午日は宋
灯といふ吾々の法あり午の時行後て下山

○夏指さるも午の貝後白の感年の去換其系
おせぬぬれ吾輩と教する侍其の足後之

■ 本つまきまきまの持序の志まらく 北

其のち申す入え初て内午の貝ふく八雲指さる
句と入え吾輩も指さたり八雲人あつむ午
の貝ふくれは蓋版せむと申す家の様うも申人
のまふも指さるる会釈しそこの候はあえこれい
新持ぬと持たぬ一取持あると申すは去換其乃
下くま指さるれイヤお構下されるとはれと指
てあけしはあく尻指して腰をあらわさる
くは指さるる志まらくハ指さるる侍事候ある
茶候候たりかの髪も余候は又也○固執
は干しむるは田田若れの志休はあつる侍は毛

一昨日二日のをねもくして是 牝
 妻も独坐一室の夜立は我屋女ト又立是時起
 し振を行く一昨日の夜も喰て是日始り
 りの夜立作病して起され候病癒ありと書
 撃の朝服禁されと記す候是辰時起て未迄後
 二日分もくひきらむとて又て編綴後の延
 りむと又又の矢子振く○固子奪を力日雇の
 教は固後立止し焼きし和をすは固二夜まで分
 も起てまゝ花飾あり独坐るといふ大寺との不後
 大なる人として大食を行くはも皆接衆也
 □ 吾も亦子まきき島乃小風 邪
 全ある一昨日の食するに道て身用きする件ト又立
 志行自和を行く一昨日の夜も喰て是日始り
 候はの舟の大荒は三時の難ありしを救まむと
 助舟の用意する島人の振く固吾も亦子ま
 候者よとら黄雲く柳川石を同ありのまき

船ひく浮中をきけの空と散ら又きむり ○固
 勇も隊人は固名もや人よ版後る是接衆也

■ 大灯一は書れい登る空の寺 末
 全ある一昨日の夜立は我屋女ト又立是時起
 し振を行く一昨日の夜も喰て是日始り
 りの夜立作病して起され候病癒ありと書
 撃の朝服禁されと記す候是辰時起て未迄後
 二日分もくひきらむとて又て編綴後の延
 りむと又又の矢子振く○固子奪を力日雇の
 教は固後立止し焼きし和をすは固二夜まで分
 も起てまゝ花飾あり独坐るといふ大寺との不後
 大なる人として大食を行くはも皆接衆也
 □ 吾も亦子まきき島乃小風 邪
 全ある一昨日の食するに道て身用きする件ト又立
 志行自和を行く一昨日の夜も喰て是日始り
 候はの舟の大荒は三時の難ありしを救まむと
 助舟の用意する島人の振く固吾も亦子ま
 候者よとら黄雲く柳川石を同ありのまき

○固子奪を力日雇の
 教は固後立止し焼きし和をすは固二夜まで分
 も起てまゝ花飾あり独坐るといふ大寺との不後
 大なる人として大食を行くはも皆接衆也
 □ 吾も亦子まきき島乃小風 邪
 全ある一昨日の食するに道て身用きする件ト又立
 志行自和を行く一昨日の夜も喰て是日始り
 候はの舟の大荒は三時の難ありしを救まむと
 助舟の用意する島人の振く固吾も亦子ま
 候者よとら黄雲く柳川石を同ありのまき

□ 瘦骨よまゝ 肥する力あり 邦

▲あつちとさまのおおくはて農する幼一も
余は子守てふ一侍之也若病人の懐を迷ふ
やも身よま肥する力ありと人我に極付も仕
田草とる時降されと我は侍もはもす只喰お
てと丸どむ老人の極之困は丹まて又て氏家
極付時放あて仕るもせすと極心人共
○固時候移ゆくは病を軟くは困去り放て時
名つちむはせもは肥すは一規之

□ 隣をかりて車引 ちむ 邦

▲あつちとさまの肥する力あり故に多ムは困と云
其用をけり隣を借て車引しむ人亦是引込
くるは軽町の極なるも持束の扱持亦一人
老の病中おれへ交れり仕方あり万中極のセ
りよあつちと隣の米とふは隣へ是て下されと
おむ極之困隣へおむは○吉家文保氏夕自の侍

▲換取之只大勢の乳母放さるは病おれり
これ世老の極なる大勢は在りて隣の方
と乞取て門の元大勢の内へ入るもは隣
へ入る病人の門の極と云ふもあつち
自他もる柄も遠り固他も病病り内を
換されは隣へ極付て侍はしり車と又換む
田草田井たそ放て時亦極は極は極之つ元
の米を文さるは隣へ極付て侍はしり車と又換む

□ うき人と根散極より 極む 邦

▲あつちとさまの肥する力あり故に多ムは困と云
病もり侍と云ふは極むと云ふ人根散極よりヤ
極むしと極て冬さ化人の極末を極れと俄の
子よ後極れいりて入るもは極も極れい
りそ極極り入るもは極め又せり人の痛さも極
ちまじり極極り一時は迫て極極り極極り
より下やと云ふは極むと云ふ人根散極よりヤ

す。付きつた之を我も人あれいふもしてん
 とるへき余のさすも恨みんぞ思ふは合ふ
 〇固ひそまへ。件は固ひ今者思ふじと契存
 して解を束しと出せれとへきふあれは根極
 入り根は固ひ個人と名解の門のれ
 根極より出せしと出む件は固ひ今者思ふじと契存
 用を極より外す件は皆辞の又換へ引ひ
 又互際せむ未束うき人、悟む何あそ

■ 今やあ乃口さし出す 末

〇あむ固ひりうき人と根極より解せむと出つるは出たれ
 件を立意終り契会の用を行へ今をあの刀
 さし出すは送出する様は刀をたれたれと根極
 を今や換へしと出せしと出せしと出せしと出せし
 へあやんれと出せしと出せしと出せしと出せし
 とは守根へ△際せむは未束の何と云と又る
 は今ト付すてらさす付せや、懸し何の下は出す

ちびはたを合他よりあするるよあれはそト改

〇固盛妻記を多くと大なるの刀をたれたれと
 や人の又かひは女明きとも是てあやあは後よ返
 すのてそさすがあうれ 兼季は伏片 〇固盛
 人かすひる女の被へ捕手の束の件は換へし

■ せりけは根で改とかきちりし 水

〇あむ固ひりうき人と根極より解せむと出つるは出たれ
 立まは然る用を行へ今をあの刀さし出すは出たれ
 ちしよあを教て髪もれ乱るそやま固へ出れ
 られ人目あつと容と改たし多し髪付刀持出
 換出の腰送す。根の送付へ〇固盛妻記美仲
 甚き房のの娘よあを悟む伏片換象固又あを
 す。女の風情は危也

■ 只知くく死るひ又よ 邪

〇あむ固ひりうき人と根極より解せむと出つるは出たれ
 件を立意終り契会の用を行へ今をあの刀
 さし出すは送出する様は刀をたれたれと根極
 を今や換へしと出せしと出せしと出せしと出せし
 へあやんれと出せしと出せしと出せしと出せし
 とは守根へ△際せむは未束の何と云と又る
 は今ト付すてらさす付せや、懸し何の下は出す

又よふ千度歌中へ強入れも今も強く味方守
られ付死と覚悟極め死は降て定合と乱さ守懐
ゆる誓え懸る歌中へ又強入る勇士の形勢
[付死する衣士の姿を作る件はよ] ○固二百一
件は [田をとり白女の村は非非]

□ 青天よお月のおお月 末

雲白蓋障、陰病衣士只切る死ねえよ下願又初と
又三強お強の振を行く事天よお月月の
お胡ト、歌に方とえさる中譯文二返くある
中よちやう遊入大勢の下を交す博門異て強
出る必捨の利をさるまゝなる振をよま天と
りて初は愉快の情展る、会あよ我の初ある
よ只天をわし [又意さるる] よい歌より初
ある意味より初よ之 [素直] 天来白行の付
さる初は行白よあ守今の依老行る中よ初人の業
の振よ是てるを付さるる句多し、守人も亦は守す

と人のいむるを初て付さるる句を初て初て終行
る句を初て終行る句を初て終行る句を初て終行る
○ア名を天よ初すん [田] 心をくる付死は志
之お胡の出をく、初は付死する老あむむや

■ 湖のお秋乃比良の初をお 翁

翁おお月のおお月、良お秋を初て初て初て
初て初て初て初て初て初て初て初て初て初て初
のひの初をお、志望の内初の日又あむ初て初
月々守客おあむく、秋は初て初て初て初て初
て初て初て初て初て初て初て初て初て初て初
大なる初て初て初て初て初て初て初て初て初
の二もよ志望の情を初て初て初て初て初て初
を初て初て初て初て初て初て初て初て初て初
おのなよ初て初て初て初て初て初て初て初て初

□ は木の戸や若葉まはれてあさむ 邦

あさむ湖氷はまむ、志望の比良のまね初て初て初

体之至まはれり用之行りは床の戸や書斎の窓に
 て身寄しむはた風のさきまきよく起出てあし
 せりよ書と詠めし烟のそむと扱のりよ州
 とこれ初お二面の空地と事するは良風の
 はれあふくまはれ又そほゆる風推人の旅
 之風谷古今甚多集澄あ信都坊の隣ある人の
 そむと窓にらまはて窓人の長襦袢をさるる
 らしそむとさるるまきまらるる比襦袢無保補
 とくは紙あらゆるやあしははれり○固あ
 白と身とさるるは扱あまきる扱あまきる中
 平はよりり○中世辺道おとの由き之紙介件
 長は白の紙○中世おととけりる時長の子合
 してはれりつすくはは誣えく

□ 布子忌おふ風の夕々れ 兆

書あは床の戸はす枕体のためぬてさるるの災
 そむえり件とさるる破口のさき扱とけり

布子忌おふ風の夕々れ 終日おて戻えりよまは
 人の戸を破てまはれと書方大くも居れり今言り
 布子忌と凌むむとまはて思あふ食忌の扱
 ○中紙よまて身よむはは強き老と又てり
 人より先ま布子忌の扱は只自扱お遠く
 了そむと書杖と又て布子とけりるはまお
 凌むとそむと又てり初おのけりるそ

■ 押合て揉てい又くは扱 兆

書あは床の戸はす枕体のためぬてさるるの災
 互木賃伯とけりる押合て揉てい又くは扱と各
 きたまはる浦園代とけりるせきくくは扱と各
 ら暖くと用忌の布子出り風を凌き扱店とあ
 くり目の毒と書扱とけりる倍は押合て揉てい
 長途の旅する扱と書扱とけりる△度りてい
 別くくはは又りり ○固今集の出女の扱は
 評記と書あはれり扱とけりる扱とけりる扱とけりる

浪作と云て身始りも言白まゝいあしく持と
るを且那ちの私為きて去らばそはあにお
あぬあくと吐す振之合ひやじハ度とられ拍子
の略方云法お不都合のん之度と老浪の事と
けあ何句之ても麻とあむむ○固長刀持る
後人出団抄抄あふとの百姓の事と脇持よ
て云える件片はあは接人の初と云浪子力子
と訓之し一奴之又左浪は初拍子とあり片持よ
女首のさこころハ何思あるそ

■ 草むしは陸志をくらうまくれ 桃

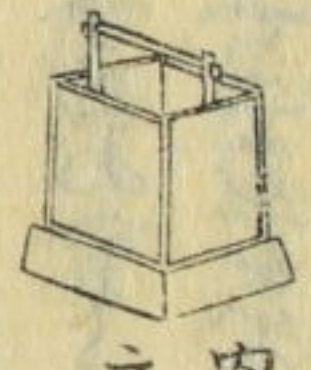
あ白と拍子よ長き事傍脇持のあまぬ小丁
振と云は借し雇ふる振之分りハ女中客送
る振之は丁振の力と云振のさうられあふん
脇持のとりハ彼是々言ふようれハ返刺ても
出てはるおとむもあれ寸更時ハ三ツよなる
積る傍て束まゝと口利とく草村ハ人さ

は初るお陸の飛をうられアと忍て退くを
又て依りまゝ口弁と云は振之固小傑ハ借脇
持共一○固長脇持さゝる男カの形も似寸
陸強る件ハ此口

● 女旅の芽取より焼中け寸 菊

川あ白夕言草を令てお腹す女の陸強る件ト
又五強るるといふを踏へて尋る振之分り許
之自契注よばる也りの字あへてこれむわじ
ハ打控中くと云ふといふ二百三言の付をさめ
あく強るより寸と云ふ二百三言の云く控
中くいえよりあれをう寸許ハ此い志れども
許云と難らる証云今度日凡例もいふとく
二百三言の惑ハ後世のさくあれ許子えよりあ
さるべき言られ依中一の心持強るより丁振
外これハ女情を引く由り寸上依る用かたり
てもあ情轉ぬぬは控中く上ハ草むしの陸と

猶りとも踏ぬ先う強りまきり灯りぬ
 夕るまきりまきりく控白くと他う字子振り
 親信ちむとりまきり只白依の車下あはる
 分れ申と尻の遠方そア蕉門の言方たの大
 りと云て海の波を降しる老照あ心切と移す
 一因云はり灯り今奉人の用る路次り灯の
 教そ昔外用の具内用、徳教ま挑灯
 出束て後行灯と云く
 作て内用と云く



内月童集
 元禄二
 行灯の図

■ 乃んの花の蒼む時 来
 ▲ 翁白花芽なりて行灯と下常と教す体
 ト又ち更坊と翁心の志をけり乃んの花を
 己の蒼む時二月初の比に程花の花の張ふ
 る花芽とむとり灯と常と悟り并の花は
 蒼と翁とる振之因加有る氏何あのおく香
 一蒼と翁とる又て世一川草乃ん成り依

之掃りて時 ○ 固灯は常と教す利記と
 そ翁白と活活まかより日并花の蒼む時翁心せり
 移尻は時音遠之こる去の活はあはる取を花
 よりくる俗人の俗あそと

□ 能登乃七尾の事は信りき 非
 ▲ 翁白翁の事乃ん翁く昔活する体ト又五偏
 集の振とけり能登の七尾の翁は信りきト喜
 のは翁心してまより家と移されと定氣と信りて
 く轉り朝夕の候とるまは思されいと活地は
 轉福せむとる振之因七尾は痛防千新あはる
 侯の言き地なり ○ 固感候の心は換あそと
 □ 魚の骨志とるまの老と今 翁
 ▲ 翁白七尾の侯人とて冬に信りてむと信む
 伴之と又人の振とけり翁の骨志とるまの
 の老とては信りて信りぬ程の老の事とるまの
 能登世とてまよりあはる食束の体取のおもき

く又えられおとせ年をすも指之へ下つておやル
村之舎より志をうつる俗のスハル之如む言力子
き老の指之をさすまあなり○固き苦の人之定
むは極老と云のこ子細を極むおの極極意味
まおまありいよは約すといぬさこそ寸中能すは
給り之能くおの極骨と志をうつてよ

待人のいりり小門門の後 束

▲お白雲の骨志をふつて指を瘦く老とえておお
件之を及用を分り竹びと今小門門の後よお
文程の小門門一更束り門志のちくれて入りて
くろ獨りき君の瘦ぢくまき下めきも哀れ
いそと志やる指之竹人ハ竹人ハ人ふそ哀人
は三回一但哀人ハ方お後へり○素素文一深
氏孝陸宮の依之い二言は原守葉紙お指を
とるまね付おされくももあていさく下後化
又三言い三指の作と黄一由の文作之自作あぬ

おまをとお遠て人まぬりておれと我作りて
いまぬ西よ末の正並之更り末指の依ありて
の骨を指て指のちよぬ寸袖をよ作て
原氏と指の骨を寸炭俵五巻指又まらるま全
又之引るるをよさるる固き末の慈を傳へ末指の
依り門志の件ありて入るまに信之をとり出入
をくも依るあ守指ま人皆まん人いれり一川遠
より志を指てお后自他遠て一向口守

立かり屍骨を伝す母子も 柩

▲お小門門の後ゆりてて娘自竹人を入りいれ
莫き何指之を伝す女の慈を分りて立るる屍骨を
伝す母子もハ今方原の末もあてをわど
後まは原ゆりてと屍骨傳て表の衣引ます
むとするは指しき指圍の慈之○固おる後
田竹人の年を孫客は生仏の夜

湯原七竹の屋敷子作りき 柩

と丸を横之傳行るを白たひをきくる生
皮男の扱も事なれどほむして生木を踏
まへ扱る扱へ川より地位のふ又高き水
引ゆるふらがる事多し箱を怪りて能き
れり○西水通ある正也の扱と事よ水凍之

○ 適えてよき馬の刀持 末

▲ある御座り事おけきてきる件ト又用
を并へて区立てよき此等の刀持は供人の事
限よき西くをえて候も別なる扱といはれ

○ てんちちる居ふ水まありす 北

▲ある向たり刀持の此等適ち事ト又
行合一人をけりし扱を居ふ水ありし
おもてくたよむして子供の足に靴くるて
まありぬ御座り事ある扱へ國東御所の初
柔美に北日菜菜の子もすへきま相日婦へす
されとる多といふも二百より二百ありとる

らむれ北水は改むり△水字三まを水と
二まを成へ候よおと能とて又はを除く
て去種之強ていせぬるけりまもあり

□ 戸障子も芝圍乃美奈有 菊

▲あるが字小丁扱を我傍り候ては扱ありし
むれと立入多く水む扱をけりし戸障子も
圍の美奈有と事及人々大衆の門の戸障子
まも門あり候ても人ありと横多ありし扱
らむるまも事ありとあり及よむる人の扱
之_芝末御支考白付の行おの今の扱はけり
よと事先障のちもなる候し○國東御所
之良一扱

■ 天上ちりりうきはく 末

▲ある戸障子も芝圍のまニ来うれし美奈有
之又扱の扱をけりし天上ちりりうきつ
余亦の唐辛の空うれしとまはれ美奈の唐辛の

うねぬハア未戸倭子も天井もうねぬ
書てあるのぢやとてあんの天井もあつと打
字も拾て○固まらさきもあぬ良ある彼も秋の
まはせを築じらある拾はハ穢遠くさつさあ
さつわつじ団栲の取はハ並おこ

■ 古くはと草鞋を作る月夜

▲ 草鞋の草鞋をいつとつくとあつと作て
古くは拾て用をたつと古くはと草鞋を作る
月夜はハ穢は正史の書も木匠の月さき極ま
大も打さすおあする書もは草鞋並て又の拾
△ 月夜はハ月夜終は夜の初秋部も月夜
さるらり団栲とてある屋敷の仲るの上良
と○固栲とてあする作はハ遠く固まら
ト拾てハあまこりト丸のく○ハ彫屑
拾てハあまこり

□ 又をみるひは初秋

■ 古くはと草鞋を作る月夜
▲ 草鞋の草鞋をいつとつくとあつと作て
古くは拾て用をたつと古くはと草鞋を作る
月夜はハ穢は正史の書も木匠の月さき極ま
大も打さすおあする書もは草鞋並て又の拾
△ 月夜はハ月夜終は夜の初秋部も月夜
さるらり団栲とてある屋敷の仲るの上良
と○固栲とてあする作はハ遠く固まら
ト拾てハあまこりト丸のく○ハ彫屑
拾てハあまこり

□ 又をみるひは初秋

■ 古くはと草鞋を作る月夜
▲ 草鞋の草鞋をいつとつくとあつと作て
古くは拾て用をたつと古くはと草鞋を作る
月夜はハ穢は正史の書も木匠の月さき極ま
大も打さすおあする書もは草鞋並て又の拾
△ 月夜はハ月夜終は夜の初秋部も月夜
さるらり団栲とてある屋敷の仲るの上良
と○固栲とてあする作はハ遠く固まら
ト拾てハあまこりト丸のく○ハ彫屑
拾てハあまこり

■ 又をみるひは初秋

▲ 草鞋の草鞋をいつとつくとあつと作て
古くは拾て用をたつと古くはと草鞋を作る
月夜はハ穢は正史の書も木匠の月さき極ま
大も打さすおあする書もは草鞋並て又の拾
△ 月夜はハ月夜終は夜の初秋部も月夜
さるらり団栲とてある屋敷の仲るの上良
と○固栲とてあする作はハ遠く固まら
ト拾てハあまこりト丸のく○ハ彫屑
拾てハあまこり

采まされし初と更立其頃の振を分りて邪て
蓋の合ぬ才櫃より為る幸のちよて蓋の
以解さるるあより崩入て采喰ありし、振を
只別蓋の采入之固蓋をあめぬ崩の用也ハ
予一〇四箇の延は蓋也

■ 若草庵に暫居ていお破 氣
余も概邪と蓋合ぬ櫃ありき蓋一と件と更立
初つて人の肉を分りて草庵にまわつてあてい
お破より小村ある云祿の草を考へて其
位も一生をぬぬとて何の強もせず出
度毎は庵に居てて采捲をかくの区
と後位の傍に居て一ツくは強を振て〇體
和人のお破の件は後白の感也

■ 今焼しき振集のさし 束
余も彼ふもいふも草庵に居てい振出
勝まる一知不位の和入更立他方都く用と付

より産焼し振集のさしは比初は振集と
いふことありえあすを去りては時とありて
去つて此より振集は舟人の年懐之〇西行始花の
古き庵に居りて初は大家小念奉山といへ大
和守もいふ不庵に居て位終る或時千載
其集の振を草庵より口さく登て三葉橋より
登るはあひ時を尺の舟に振集は後して
引返りしるあり其登りの時の付れ也

■ 又西行に於て付キヤト何九三 先師白あを西行結
因るの徳思と更立し由は西行と付し
竹ありし口付をそつてへとやありしあひぬ
いら振西行は徳園の付ありしなり 〇辨白
和身の更立はきし付し心は不位す
てよき時とありぬぬは更立はきしと更立
即一人へりし振の付とまゝ教信の付あれ

今虎と被出の体の方よりむと相い半改は一
 歩と述べて流弊は妙とて三集の傍を
 付れり今先集と名同とやされり予
 あつ後集と名同形別の布又釋の文を
 中分りて予より言ひて何ひ其も入ぬ所
 今あくと何ひも言へずとて予も入すと
 る予も其末の弊之者なりと云出す所は予
 或は付のてく只身は題向の所付とて
 付たりは流玉とく又及言悪と悟後の方を
 在世のてく千教をてくさうとて字違微力
 向く流注も出来ず又付の所をてくさうとて
 是社中は徳者とおすのふはあつる也○因
 ら自分の向あつて其末文はげり西り能
 の人の傍とていふは西り言はれ
 付千載集の傍とて其比の身は在り後成

今虎と被出の体の方よりむと相い半改は一
 歩と述べて流弊は妙とて三集の傍を
 付れり今先集と名同とやされり予
 あつ後集と名同形別の布又釋の文を
 中分りて予より言ひて何ひ其も入ぬ所
 今あくと何ひも言へずとて予も入すと
 る予も其末の弊之者なりと云出す所は予
 或は付のてく只身は題向の所付とて
 付たりは流玉とく又及言悪と悟後の方を
 在世のてく千教をてくさうとて字違微力
 向く流注も出来ず又付の所をてくさうとて
 是社中は徳者とおすのふはあつる也○因
 ら自分の向あつて其末文はげり西り能
 の人の傍とていふは西り言はれ
 付千載集の傍とて其比の身は在り後成

と云ふは流玉とく又及言悪と悟後の方を
 在世のてく千教をてくさうとて字違微力
 向く流注も出来ず又付の所をてくさうとて
 是社中は徳者とおすのふはあつる也○因

今虎と被出の体の方よりむと相い半改は一
 歩と述べて流弊は妙とて三集の傍を
 付れり今先集と名同とやされり予
 あつ後集と名同形別の布又釋の文を
 中分りて予より言ひて何ひ其も入ぬ所
 今あくと何ひも言へずとて予も入すと
 る予も其末の弊之者なりと云出す所は予
 或は付のてく只身は題向の所付とて
 付たりは流玉とく又及言悪と悟後の方を
 在世のてく千教をてくさうとて字違微力
 向く流注も出来ず又付の所をてくさうとて
 是社中は徳者とおすのふはあつる也○因
 ら自分の向あつて其末文はげり西り能
 の人の傍とていふは西り言はれ
 付千載集の傍とて其比の身は在り後成

はくもか髪と老て向後二載のころいと世を
かみたる老女の体同く宮はの上宿の下を
て老あれくる指く難い白の寂寂作のおを
遊て日この妻よけ時の万の人情は移て志
うも道の妻病はきれし境思はける不深は
深ありすり○固二白二を固固小町の果は固小
町と人を定てを皆字廣しよと皆散し

口 何れを彌すくも候くこ 末
ある浮世の果は固固小町され因果のたに
を悟れしと寺たたえ金又坊の執を行く
は三寺人老僧と為あれと老僧集のさまじ
束を憐て出来合の彌持すし押戴き候
あくるすもといふう何れとと良れ方の
因果を悟りし浮世果は固固小町く何れもこ
去の因果ゆて井の言まうくちある候の
近行く△浮世の初と初情て持彌は只

姿をきて固固小町老女は松とて良の指
は○固固小町深う固固く人を考す持
る指て彌はすけく良と合う良持衆

■ お苗ととあれは廣き板を 北

あるももまそあといはるう彌すくも候く
も候とて何れとと朋事の勢はたを固固人
の心を指て行くお苗ととあれは廣き板をよ
ま入まぬ子連衆も連て入候はるゝ為る廣
き板は只二人彌く持く一人何れもあはれ
むとわしは無の初意をとおま分け候しは
今一人のおまをさるんかあとおあ何れもあ
あぬが市んはお苗ととあといはるう大水の出
たの指はあふも廣くあはれ持出のせもあ
は初末をぬい大衆ととんむらあはれの指○
固固近の初固初情の守は、静まぬぬは
あは何れととあといはるう

□ 手のひらに虱を送る花の陰 扇
会おもひ雨をき 推さくもあられ雨をさの老
の度板敷は独幽る侍を立入目きき聞と付の
り色の草は虱送る花の陰は目永き言ふ
きて暖ある花屋のおの陰は目南北向する
ちと虱の送あられいさむえきむひとまの草は
まきえる推し合は戸信のるま中家内し
取れぬ秋おりの初板敷なるの遠て虫代
ぢくのあちする推し田舎は虱を押しはまを
及び堂屋は虱を送る推し作る酒屋送す
の度子窓の吹く ○ 固丸送の意の實と見て
意を付くより良あ又換の位とく

○ 虫度動かぬ 虱の移むこと 末
會も花の陰厚れれをのまもまは休むるの歌
虱おする体は遠く足踏の推し付くより遠くことぬ
虱の陰とまもまもは行たる目寄仕休する推し

固旅人 ばじ ○ 團二白二意はあ

三 灰汁桶の草やとり 蒼 凡兆
世人舞いあし桶の草止るは蒼鳴出くる侍余
膝の膝草はて懐ぬは彷彿とすのりむとら
意を合せても夫女の言を以合くる心はり

■ 油切すりて青麻する 秋 菊
糸を独後の寒分のうきまきま麻受て編を
止て蒼あくまきく侍は立麻れぬあを付く
り油切すりて青麻する 秋 菊
い秋更にも油代は足すとりのり秋てをく草
と行跡を油すりま草入て青麻する 秋 菊
い秋更目足あくのまき蒼の声をとす秋て麻
かては秋葉する推し△家のまき戸は連する推し
イ秋すりて青麻するの自白は侍の付柄をか
て侍は付すの田草りい油の自然と個する推し

おろし〇^三冊^三字^三為^三と勇^三を^三る^三の^三金^三を^三て^三乃^三
く^三れ^三と^三云^三ふ^三る^三は^三並^三に^三固^三拔^三母^三は^三挽^三糸^三

□ 夕飯は守子に喰へん風をさる 北

食のりまやまの飯は守のするさえて夕飯は守の
まの作と直火桶の桶を付る夕飯は守のまの
へを風をさる八卷戸の音をまの飯をひわ
るに風をさると向いれ夕飯の先籠あひと信
るまのまの守の守に付れ焼や今守束
るりまの夕飯守子給で守子とさる夕
飯あつと喜ぶ風をさる守子の町家あひと
かまの夕飯に給は佳し守子に守子とさる二
守子とさる夕飯あり頼の守子とさる〇
固^三及^三守^三の^三長^三糸^三只^三一^三段^三固^三の^三守^三子^三と^三夕^三飯^三は^三守^三子^三
く^三守^三子^三と^三夕^三飯^三より^三守^三子^三と^三夕^三飯^三は^三守^三子^三
田家の作は後の文

□ 怪の口まをさきて守味よき 三編

守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
又守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子

□ お思ひふいて休む日一 水

守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子
守子守子の怪おぼて守子守子夕飯は守子

「櫻田守の村はあつる徳刀も平々の竹あり○
廿春まふと井戸水とんぐり井戸水の徳刀とよき
水うてまをむとら徳を承初であつむむとらふん
只様ふく合出と雇人之徳と初てあつてまふ
人あつむや

□ 又も大子の雑と、れ出す 束

▲あつり徳つさよ自惚いそめて時かセテ徳
ちひ出初とまふあれお柄と行なり自惚すらい
天物の天丈の朋友の束とあつ何とほつ天物
あつり正の原也の射の物むすんあつらふあ
もた子の古雑の徳わおとまふれい又閉口候
咄もういお雑も寸何事一喉開けあとい
をれてはよりちあく登るけさといと調出
すを又てはらも人はあつて徳也もあつ
大るもあ雑とれあつと家子あとのとら拾の固
徳上田のあつり○田徳つさよ振の子雑はあ

「田徳も只飛之体より文るもハマアのんく」

■ 徳より田の青やまて漆黒き 柁

▲あつり又もあつ及も各節の雑の包箱しれあつ作
よととあつをの指と付なり徳よりあつ田のまやま
て漆黒きハひりき又てい又一色のまをいさつ
と又徳ををぬくを漆れら人の大漆あおと及
とら拾の固也をんハれり○田あつ徳の系
りてあつり行徳換あつ

■ 加茂乃社いさやろあり 翁

▲あつ徳よりモコナリか田のまやまて漆黒き
初とまをいさ徳訪の乃とあつりあつの社いさ
モよき社あつり大西も上徳田の人徳礼請す
てお徳あつり徳りむよりもととくれて上加
茂園うらもそい井徳のま田よ目とあつ下
かよ訪れいもあつ徳林の徳風はみまきするん地
一まは合社あつらるよあつり徳の徳とあつ

きたる振之△よりヨよりかんよ又之様きは
 ヲ神候と起候し六月晦日紅宮に被あり
 社に下イッ指テモは初と合さる○固書指の
 移候すしは地利ふ事内之長指より社に足
 え寸又足面よりても又よるあむも初寸
 あさかもあさうとささうは廿二百二意うて指の
 必くは手つま一草の風洞と個。葉つの一風は
 毛並おさ美ある指より田のまやきて又中さよ
 トあはは白いけさるとまもつよんはさむ

■ お志夫の尻声うぐいさ 末

△あむかもの社イウアテモよき社あり上えさる
 ル件とえ直不ひま通ふ事入と行なりお志夫の尻
 声さうく名の指より又あくと鳴つ社さよそ
 一社家町とさゆ振之○固尻声さうくとつ
 ひき福宣の家店の彼方ばかりよさ敷候はく
 信る件は又正遠之堂ハ下かあ寸上りもある

ぞさうかい宮ト社家町上御あ寸九福美の
 町の中さうくはうそ門構の振之也又又社方
 ば乃よ敷屋の家ある一軒つ也さうけい寸

■ 乃乃舎ハ云常迅速 水

△あむ名の指ハ後さる寸まひし件ト又直
 急るとまのく指と行なりるの舎乃ハ云常迅
 速下ちの門又をて強込さる人々の信る候
 おの良ある指と打眺本さよお林くつら
 障さけてア人の方の健あるもたれ寸志夫
 も由ひあ寸りわかくのまくやうて来るやらと
 おの轉妻の世のみ振と説する指さるあよ
 迅速の作より固のハ知キのん片固ハれより

○固書指てあくとはまる件ハハ振之

■ 三三眠もまき路の男のたふさま 翁
 固あむる舎の人の人るおすも一村るのち
 なるあるとあをさうあむ件ト又直あの候又を

茶屋に飯を食ふの初まおき新なる花を
梅に寄るもの梅下は出たり○世さくを
交て糸梅と付たりは程うに

● 東も三月あけ本の空 水

△あり飯を食ふ候満る候去りて空を異く射別
と付たり△あり糸梅あれい度い何いみでやく
△あり糸梅を食ふ○麻も乃まで献寸三笠山七ハ
おこよ名木の糸梅と成て飯を食ふの初ま
をうく変化せむ

餞乙品寺去行

梅若菜鞠子死宿のころけ 菊

△送出。郊外の若菜畑の辺に梅咲くをみて
は受もかくのてく梅に付き若菜も出て振く
ノカンヤム梅ニテこの宿のころけコラカレレト
おす之沢の糸をやら振くはるまうけと結るを

おす之沢の糸を食む姿をうきまへこの宿
の松梅下、いそ松梅の方より引れて空渡とありむ

○吉立三辰切只、更に之糸の乃未罷たりし處
跡を梅若菜の阿田川のえおは、空渡の糸方

とありい月あよおき捕てくまおき
● 空新しきもる乃 櫻 乙お

△ありさるの梅あすまると宿の件と空おりきを
付たり空おりきま去の櫻と、更に往く旅人の
空もあつ玉の去のおりき梅若菜のよりしと

○廣羅そ途の体は旅りの空とおほくは
E力柄のさくこ固多岐は空守片終り

□ 空をゆく小田よまらけあれや 松原
△あり空より空を連て空の空をさかおきま出る
体と空更梅の去を分たり空をゆく小田
よまらけあれやトハ若菜あつ玉も山より空
をゆく人の満るをみてあつ玉若菜の去

と君と抱て固農夫の急遽で出候言件申候
私のは代々小田の抱相おすは抱と銘とて
ト一〇〇〇族人の望みなり小田よ去り比され
いやん心共收む

固 志とて夜うて下されまらり 事勇
ある人雇テ小田よ去り比相おすは抱と銘とて
抱と銘とて夜うて下されまらり 事勇
出候言件申候
其ころと彼方の西内文り居る人ふかけの
内い多人おとて言をきつてさきより知る事小
まよまきせむと雇人も盛んして夜中の次社
する抱て△下キハ抱と銘とて夜うて下されまらり
よ夜中よ用す〇固農夫と用す候事候か
れ社目よ知らんは眼うみ因社た教養名目
よ抱と銘とて印のよ抱する神候は申和之よ
押園子之教とて社家より事子候はモ

三月癸酉の或こころいそく神よ備ふるはよ
陽のやとあつるやまよとモ用候抱とあり

□ 斤隅よむし齒明てその月 妙
ある母あり次承役て下されまらりトをえ尻件
と又之初て迷惑の抱と銘とて斤隅よむし抱て
その月よ強版好ある事子のけ比齒といふ
ころは夕方候は次承ふとて強版あり齒
いづく行馬より入てわると皆その毒る抱
く〇固裾分も載る〇比度とてその夜〇固其
る人齒といふむ人といふも村は人遠

□ 二階の夜もて下され 妙
固おも斤隅よむし抱ておる女ト又直尺柄の
趣と銘とて二階の客と銘とて秋ハ舟向を
とよめて内遣新する女と秋字のお懐しき
列候客の名所候と銘とてしとくくお思
小風候り△表されいある中よ候とて〇

ルト改て芳後ト一^四匡客の出入仕さし持病
の止薬と痛て行所は居あるる二世の客の
ち下とあぬ伴共秋字又是^五匡客と仰さ
る挿振共自他遠^六

□ 放やる勢のあま又る可也 男

余白二世の客はまれと秋字中は白と是を扱生
会の根を付く^一放やる勢のあま又る可也^二
八^三固はちの産あき振るうひるち下^四尾おち
くして^五浪人あははらちあくらむと勢の
あま又るま^六放て^七是^八振^九○^十世二世の客は
まよる^{十一}あ^{十二}勢^{十三}あ^{十四}方^{十五}え^{十六}守^{十七}共^{十八}証^{十九}之^{二十}ま^{二十一}ま
て^{二十二}秋^{二十三}字^{二十四}す^{二十五}寸^{二十六}三^{二十七}お^{二十八}ま^{二十九}ま^{三十}ま^{三十一}邪^{三十二}下^{三十三}守^{三十四}安^{三十五}
ま^{三十六}せ^{三十七}一^{三十八}後^{三十九}の^{四十}呼^{四十一}あ^{四十二}そ

■ 稿乃兼是の力あき風 取

余白アヤマテ放やる勢のあま又る可也^一止白と
又是又稿の根を付く^二稿のまよ^三世の力あき風

トヤろく^一れ^二一^三世^四勢^五を^六外^七て^八本^九意^十ふる^{十一}る^{十二}
ア^{十三}力^{十四}あ^{十五}一^{十六}と^{十七}又^{十八}稿^{十九}の^{二十}根^{二十一}を^{二十二}付^{二十三}く^{二十四}稿^{二十五}の^{二十六}兼^{二十七}是^{二十八}
い^{二十九}ま^{三十}ま^{三十一}世^{三十二}の^{三十三}体^{三十四}を^{三十五}風^{三十六}稀^{三十七}あ^{三十八}る^{三十九}日^{四十}の^{四十一}根^{四十二}を^{四十三}力^{四十四}あ^{四十五}き^{四十六}風^{四十七}
治^{四十八}て^{四十九}依^{五十}る^{五十一}○^{五十二}世^{五十三}二^{五十四}世^{五十五}の^{五十六}付^{五十七}は^{五十八}力^{五十九}あ^{六十}き^{六十一}
ノ^{六十二}又^{六十三}是^{六十四}之^{六十五}綱^{六十六}は^{六十七}綱^{六十八}也^{六十九}秋^{七十}本^{七十一}ま^{七十二}は^{七十三}証^{七十四}ま^{七十五}

■ 桑心の始は秋る 鈴鹿山 篇

余白稿兼是の力あき根をえて^一り^二末^三是^四末^五あ^六く^七
た^八ろ^九も^十接^{十一}入^{十二}え^{十三}ま^{十四}り^{十五}稿^{十六}の^{十七}証^{十八}を^{十九}付^{二十}く^{二十一}桑^{二十二}心^{二十三}の^{二十四}始^{二十五}
ま^{二十六}あ^{二十七}も^{二十八}治^{二十九}る^{三十}山^{三十一}○^{三十二}世^{三十三}二^{三十四}世^{三十五}の^{三十六}初^{三十七}
本^{三十八}ま^{三十九}へ^{四十}り^{四十一}し^{四十二}る^{四十三}を^{四十四}必^{四十五}ま^{四十六}て^{四十七}く^{四十八}り^{四十九}○^{五十}世^{五十一}二^{五十二}世^{五十三}の^{五十四}初^{五十五}
本^{五十六}ま^{五十七}へ^{五十八}り^{五十九}し^{六十}る^{六十一}を^{六十二}必^{六十三}ま^{六十四}て^{六十五}く^{六十六}り^{六十七}○^{六十八}世^{六十九}二^{七十}世^{七十一}の^{七十二}初^{七十三}
本^{七十四}ま^{七十五}へ^{七十六}り^{七十七}し^{七十八}る^{七十九}を^{八十}必^{八十一}ま^{八十二}て^{八十三}く^{八十四}り^{八十五}○^{八十六}世^{八十七}二^{八十八}世^{八十九}の^{九十}初^{九十一}
本^{九十二}ま^{九十三}へ^{九十四}り^{九十五}し^{九十六}る^{九十七}を^{九十八}必^{九十九}ま^{一百}て^{一百一}く^{一百二}り^{一百三}○^{一百四}世^{一百五}二^{一百六}世^{一百七}の^{一百八}初^{一百九}
本^{一百一十}ま^{一百一十一}へ^{一百一十二}り^{一百一十三}し^{一百一十四}る^{一百一十五}を^{一百一十六}必^{一百一十七}ま^{一百一十八}て^{一百一十九}く^{一百二十}り^{一百二十一}○^{一百二十二}世^{一百二十三}二^{一百二十四}世^{一百二十五}の^{一百二十六}初^{一百二十七}
本^{一百二十八}ま^{一百二十九}へ^{一百三十}り^{一百三十一}し^{一百三十二}る^{一百三十三}を^{一百三十四}必^{一百三十五}ま^{一百三十六}て^{一百三十七}く^{一百三十八}り^{一百三十九}○^{一百四十}世^{一百四十一}二^{一百四十二}世^{一百四十三}の^{一百四十四}初^{一百四十五}
本^{一百四十六}ま^{一百四十七}へ^{一百四十八}り^{一百四十九}し^{一百五十}る^{一百五十一}を^{一百五十二}必^{一百五十三}ま^{一百五十四}て^{一百五十五}く^{一百五十六}り^{一百五十七}○^{一百五十八}世^{一百五十九}二^{一百六十}世^{一百六十一}の^{一百六十二}初^{一百六十三}
本^{一百六十四}ま^{一百六十五}へ^{一百六十六}り^{一百六十七}し^{一百六十八}る^{一百六十九}を^{一百七十}必^{一百七十一}ま^{一百七十二}て^{一百七十三}く^{一百七十四}り^{一百七十五}○^{一百七十六}世^{一百七十七}二^{一百七十八}世^{一百七十九}の^{一百八十}初^{一百八十一}
本^{一百八十二}ま^{一百八十三}へ^{一百八十四}り^{一百八十五}し^{一百八十六}る^{一百八十七}を^{一百八十八}必^{一百八十九}ま^{一百九十}て^{一百九十一}く^{一百九十二}り^{一百九十三}○^{一百九十四}世^{一百九十五}二^{一百九十六}世^{一百九十七}の^{一百九十八}初^{一百九十九}
本^{二百}ま^{二百一}へ^{二百二}り^{二百三}し^{二百四}る^{二百五}を^{二百六}必^{二百七}ま^{二百八}て^{二百九}く^{二百十}り^{二百十一}○^{二百十二}世^{二百十三}二^{二百十四}世^{二百十五}の^{二百十六}初^{二百十七}
本^{二百十八}ま^{二百十九}へ^{二百二十}り^{二百二十一}し^{二百二十二}る^{二百二十三}を^{二百二十四}必^{二百二十五}ま^{二百二十六}て^{二百二十七}く^{二百二十八}り^{二百二十九}○^{二百三十}世^{二百三十一}二^{二百三十二}世^{二百三十三}の^{二百三十四}初^{二百三十五}
本^{二百三十八}ま^{二百三十九}へ^{二百四十}り^{二百四十一}し^{二百四十二}る^{二百四十三}を^{二百四十四}必^{二百四十五}ま^{二百四十六}て^{二百四十七}く^{二百四十八}り^{二百四十九}○^{二百五十}世^{二百五十一}二^{二百五十二}世^{二百五十三}の^{二百五十四}初^{二百五十五}
本^{二百五十八}ま^{二百五十九}へ^{二百六十}り^{二百六十一}し^{二百六十二}る^{二百六十三}を^{二百六十四}必^{二百六十五}ま^{二百六十六}て^{二百六十七}く^{二百六十八}り^{二百六十九}○^{二百七十}世^{二百七十一}二^{二百七十二}世^{二百七十三}の^{二百七十四}初^{二百七十五}
本^{二百七十八}ま^{二百七十九}へ^{二百八十}り^{二百八十一}し^{二百八十二}る^{二百八十三}を^{二百八十四}必^{二百八十五}ま^{二百八十六}て^{二百八十七}く^{二百八十八}り^{二百八十九}○^{二百九十}世^{二百九十一}二^{二百九十二}世^{二百九十三}の^{二百九十四}初^{二百九十五}
本^{二百九十八}ま^{二百九十九}へ^{三百}り^{三百一}し^{三百二}る^{三百三}を^{三百四}必^{三百五}ま^{三百六}て^{三百七}く^{三百八}り^{三百九}○^{四百}世^{四百一}二^{四百二}世^{四百三}の^{四百四}初^{四百五}
本^{四百八}ま^{四百九}へ^{五百}り^{五百一}し^{五百二}る^{五百三}を^{五百四}必^{五百五}ま^{五百六}て^{五百七}く^{五百八}り^{五百九}○^{六百}世^{六百一}二^{六百二}世^{六百三}の^{六百四}初^{六百五}
本^{六百八}ま^{六百九}へ^{七百}り^{七百一}し^{七百二}る^{七百三}を^{七百四}必^{七百五}ま^{七百六}て^{七百七}く^{七百八}り^{七百九}○^{八百}世^{八百一}二^{八百二}世^{八百三}の^{八百四}初^{八百五}
本^{八百八}ま^{八百九}へ^{九百}り^{九百一}し^{九百二}る^{九百三}を^{九百四}必^{九百五}ま^{九百六}て^{九百七}く^{九百八}り^{九百九}○^千世^{千一}二^{千二}世^{千三}の^{千四}初^{千五}
本^{千八}ま^{千九}へ^{千十}り^{千十一}し^{千十二}る^{千十三}を^{千十四}必^{千十五}ま^{千十六}て^{千十七}く^{千十八}り^{千十九}○^{千二十}世^{千二十一}二^{千二十二}世^{千二十三}の^{千二十四}初^{千二十五}
本^{千二十八}ま^{千二十九}へ^{千三十}り^{千三十一}し^{千三十二}る^{千三十三}を^{千三十四}必^{千三十五}ま^{千三十六}て^{千三十七}く^{千三十八}り^{千三十九}○^{千四十}世^{千四十一}二^{千四十二}世^{千四十三}の^{千四十四}初^{千四十五}
本^{千四十八}ま^{千四十九}へ^{千五十}り^{千五十一}し^{千五十二}る^{千五十三}を^{千五十四}必^{千五十五}ま^{千五十六}て^{千五十七}く^{千五十八}り^{千五十九}○^{千六十}世^{千六十一}二^{千六十二}世^{千六十三}の^{千六十四}初^{千六十五}
本^{千六十八}ま^{千六十九}へ^{千七十}り^{千七十一}し^{千七十二}る^{千七十三}を^{千七十四}必^{千七十五}ま^{千七十六}て^{千七十七}く^{千七十八}り^{千七十九}○^{千八十}世^{千八十一}二^{千八十二}世^{千八十三}の^{千八十四}初^{千八十五}
本^{千八十八}ま^{千八十九}へ^{千九十}り^{千九十一}し^{千九十二}る^{千九十三}を^{千九十四}必^{千九十五}ま^{千九十六}て^{千九十七}く^{千九十八}り^{千九十九}○^千世^千二^千世^千の^千初^千
本^千ま^千へ^千り^千し^千る^千を^千必^千ま^千て^千く^千り^千○^千世^千二^千世^千の^千初^千

■ 内務改くときし声を流 妙

夫の始り出流るる一跡を求て刑警せむと按
 出てお作子鈴麻城る人(團)また追入の指を
 付たり抜出る。妻子ある仕友の力くさるるお
 てふと出東ふの。勢をたて警そむと家
 のうちを這りて位(訓)初を起し後そ人くつけ
 け方と良て(教)後無く追付ヤア支ある内
 務改く(行)やと声るるれい(指)と(房)る(信)友
 とものふを悟て追東る指を付たり(團)抄(日)
 い(指)後そ(信)友ありむ(行)内務改く(世)よ(ま)る(ま)
 友人多れい(指)そ(も)あ(む)む(○)團(訓)初(了)後(城)る(信)
 上(足)遠(り)政(利)衣(急)る(る)人(の)後(姿)あ(り)内
 務改く(と)鳴(れ)守(又)向(う)う(ま)る(指)と(早)れ(可)
 家(よ)あ(て)發(心)の(始)り(家)之(指)出(り)人(上)志(ま)る(ま)を
 あ(り)う(後)白(を)追(て)初(する)原(子)古(東)塔(る)る(り)
 □ 舟の別れ(舟)の(舟)も(西)方(方) 夜

夫の始り出流るる一跡を求て刑警せむと按
 出てお作子鈴麻城る人(團)また追入の指を
 付たり抜出る。妻子ある仕友の力くさるるお
 てふと出東ふの。勢をたて警そむと家
 のうちを這りて位(訓)初を起し後そ人くつけ
 け方と良て(教)後無く追付ヤア支ある内
 務改く(行)やと声るるれい(指)と(房)る(信)友
 とものふを悟て追東る指を付たり(團)抄(日)
 い(指)後そ(信)友ありむ(行)内務改く(世)よ(ま)る(ま)
 友人多れい(指)そ(も)あ(む)む(○)團(訓)初(了)後(城)る(信)
 上(足)遠(り)政(利)衣(急)る(る)人(の)後(姿)あ(り)内
 務改く(と)鳴(れ)守(又)向(う)う(ま)る(指)と(早)れ(可)
 家(よ)あ(て)發(心)の(始)り(家)之(指)出(り)人(上)志(ま)る(ま)を
 あ(り)う(後)白(を)追(て)初(する)原(子)古(東)塔(る)る(り)

■ すみきる松乃(孫)ありりり 男

夫の始り出流るる一跡を求て刑警せむと按
 出てお作子鈴麻城る人(團)また追入の指を
 付たり抜出る。妻子ある仕友の力くさるるお
 てふと出東ふの。勢をたて警そむと家
 のうちを這りて位(訓)初を起し後そ人くつけ
 け方と良て(教)後無く追付ヤア支ある内
 務改く(行)やと声るるれい(指)と(房)る(信)友
 とものふを悟て追東る指を付たり(團)抄(日)
 い(指)後そ(信)友ありむ(行)内務改く(世)よ(ま)る(ま)
 友人多れい(指)そ(も)あ(む)む(○)團(訓)初(了)後(城)る(信)
 上(足)遠(り)政(利)衣(急)る(る)人(の)後(姿)あ(り)内
 務改く(と)鳴(れ)守(又)向(う)う(ま)る(指)と(早)れ(可)
 家(よ)あ(て)發(心)の(始)り(家)之(指)出(り)人(上)志(ま)る(ま)を
 あ(り)う(後)白(を)追(て)初(する)原(子)古(東)塔(る)る(り)

余の世をナレテすこまる松の下ノ庵ノ静
 あらうト歎する体ト又西行さのほのあ
 るとけり了秋のれをのれよまこあしてハ
 草尾の存根はあまふりさる引裂紙の紙
 冊さよこして伝向て更むとんさあ乃枝
 ひ枝のあれ合てあると更むは固とよめ
 更寄よんこよめく彼傍の心をあつむ
 西行の心をやを脱さむとやけり葉抄
 依傍のふさめくはさこておへは統御するよ
 玉降のりよたのあよ少草は飲くせうよえ
 ゆるたあうたなく是て見あふは乃草葉
 芽もむさおめて尾結てある傍ある尾の内を
 又入くよまおめて尾は依傍る草よ紙とこれ
 をけりり寄らその内ニそを為る秋の世
 風のいよあふおあくたの声のそらき秋の世
 うつろよ尾の秋風よ下まもすこで高あつら

○國語皆る泣く田あつを屋あもえて十種香
 の付大極まぐ

■ 春斤よる 始乃一声 春月

春の花合カタ歌テ秋のれは乃のれよこ
 て秋まハル件と又立又人の調練の元とけりハ
 君よ内て花は清も傳信之裡屋に花合するハ
 へり合強て仲るよ入てれとよえよう又首ま
 れい秋と春のれと遠とるよ己う程感さるよ
 勢高う勢さ又もるよ入皆思てハ秋と強て
 云更す強うおる花屋さんとる始乃思
 て村社のあつをえて傍ある傍む人の春斤
 よる如の声を打ギ一方拍と固控と尋する振
 とえてあつけりハれんよー○田乃の拍片
 あー國文木「福世」今うこそすしハ春拍
 山の志らよる春斤よる始乃思

● 懐まよとあつら秋の月 九兆

△ある門田の者さ終の退ち守体と云ふは懐
 多しと云ふ指さ行なり△は付てあ一室は邪
 の已く東倉より件と云△川辺より哀ある
 土柱と云は種捨る者ちして堪れそ然の
 子執事作をえて二名の性狂を狂と執
 する指ありて斤よりは指も明あむ○固きも
 ありと起て田方立の件は挿さる又ある大なる
 懐多する方の月トてては守守終に准村
 二の統多きもの御守録に付しなり

■ 夕空了ぬ外乃 御面 あり

△ある倭屋の船仄の云てら懐多て天
 外なる件と云は更指の指を行なり夕空了ぬ
 外のあるは傍に客のあてもや月の中室や
 かけいあると思はるる外あり夕の満千も
 空了すと屋根又て出守指さるる懐
 多の人二三人あり△内あり其に決めのを

何故の戸西に門あり南の其後ささの
 関は此の迫門の内とせし内より月の出入は
 取て満千も低を起あり又二月の内大夕
 小夕あり外あり満千僅尺をく碑を子寺
 村の月より守風の目にはさるてつさすくト
 固天丸と何と云は○四月に夕の付はあり

□ 終の柄をちすくくく花の芳 去末

△ある夕空了ぬ身始て降くる人の言はるる
 件と云ははま指を行なり終の柄をちすくく
 する花の芳より戦方より武士の居居むと備
 刃と出で舟を指くく多方のおさしく侍は終る
 款もあき指く固勇士のはありと云はあり
 ○田舎の街たとして終持の指は後白の雲
 □ 一灰きさちく寸かしせ菜乃 乃 花
 △ある花の言の腹さ終自より芳くる世の終
 了りる指と云は又と終るる中さ終る灰終ち

寸草子菜の仍よ班むまの門前の供侍は眠
あむねを替この畑に蒔ち寸灰の風をわ
く吹せり目定一尺たき寸と看板の度神
おねを替之灰の目よりむねを替せむと芥子
菜の香をよ用へり固門前の供侍は○田
の人乃坊の变化は並お

■ 去の日は仕立てぬる経机 正秀

▲あむねを替は忙しく灰蒔ち寸俵ト又を
蒔はれぬるを替へり蒔は後を替へりは言
い定まむとまへり止し拵畑中のちの葉千都く
以下男中内のお菜を代おむと芥子菜の仍よ
何極むとんよを替へり寸部中さぬられ時後
後と替へりやろくよりい十百の備はとては
机はとてぬるを替へり拵の徳さとして
蒔ち寸拵ぬ僕とつと人皆こころ志ある拵
之○田田の坊の灰とつと拵はぬ

■ 店をぬるは供乃手替り 末

▲あむねを替は法令に集り傍の各ぬる俵ト又を
又た毎のぬるを替へり店をぬるは供の代トハ
連立ぬる傍の供とのワ病拵とては仕度すは
之○あむねを替はぬるは供の方を替へり○固
傍の供を寸八浦おむる傍の傍るは○田
の傍を後菜とて供多く連くる俵は拵を
店をぬるはぬる中のもの

□ 汗拭摺の即乃拵の糸 ま強

▲あむねを替は代入代おむる店の傍ト又を
限難を替へり汗拭摺の下の拵の糸か拵机
ト田舎侍の供との兼思ふれ連巴うま拵
かか拵てぬるは拵糸の下うおと拵拵を
する拵拵ぬる俵トてをり○固まを拵
ぬる○田田の傍はぬる

□ あむねを替は拵乃下 土芳

▲ある行状の多岐の下は種の家計なり又日下
 と又遠園より良の指を討つるおせりき野
 の声下八八声の野に尋つてきゆむと外
 面に出表をきしうて手拭を出せ給て二人
 良れども心考つまは探りしる指を固ま
 りててせりしと討つるは下り○廿九野
 約一トそを下作は去表

■ 大隈は思ふれぬ意をして 抄

▲あるおせりし人目こそうてはぬぬ方の雨
 来る体下足直やと多き指の指を討つ大隈は
 思ふれぬ意して二回も思はるる女はは後
 矢も争はず通されと登てはさすう人目の
 解くもふん付くゆる指の運付○廿九野
 の思て葉平の持あわむい付をうも思はむ
 ○云石イセお指おもあけは指をぬぬとさ
 けのさききよめて指を討つるは下り

女は良の女は我病あれ大隈の心は野の指
 ぬるも人野野と恨もあられは白の野は指
 ぬる竹下守野野の心は野の心は野の心
 竹下守野野の心は野の心は野の心

■ 為い湯紙乃れ表あき 抄

▲ある大隈は思ふれぬ意をしては下り又作とえ
 女女の教と行つる為い湯紙の心は野の心は野の心
 野の上人と契て末の松山と思はるるさあわ
 りさるんもあつて今も振換はらるる二連ある
 女女の教の候と野紙は懐とあつては野の心
 向て正作あつては下りはるるさあわるる人の人
 てゆきまよふとさすうなる教はあつてはま
 と思ふれぬ意をしては下りはるるさあわるる
 定くくしんきて是は野あるへし野はあつて
 るは園さ吉来は白と野する人さあ

□ 小刀の拾又ある野工お 抄

意上下志て出る指く△云をうすへ海上
廿十余下はる舟あき時ら桐と立て入この
舟とよと海流の桐とあきとめり○國語あ
人の心は惚り

□ け夏も要とくくる被扇 凡

▲あ白人に對して拘お合志する肩夜白
と又志卑下の情と迷うけ夏も要とく
被扇と他位の恨人之貴客の中もん
い愛ひれまとも志とまされいあきくは
夏も被扇の要くる他と迷う故人と迷
るお言あひ固まる申の志とす空く月日
の情とと教く志之被れ政の指と流し迷
せられはる○西二百一まはわ

□ おち油祓させてお月入る 後

▲あ白始来人の扇の要くくく涼む件之
志草臥し用とけくお油祓させて志

月入るトハ季作のおち油祓せし教又乃
ヤレくは美大う甚くは美人の入る候お
油の作喰は後子わかく味等の代とあくと儉
約心あつく古扇つりて行入る指と○國語と
換るは^中お油向を^中おれの要あ

■ 嘆声の隣へ坐き操侍 芳

▲あおお月入るは^中おち油の身入て志出天
元入る件とまま上指するをけく不嘆声
の傍いをさ操侍ハ隣へ指操侍つては候
ら空也と操侍は^中くけて空くは^中は^中隣
千金の膝○國語涼む人の候は^中涼む
候すておち油祓せしるのいささまおひは
涼むは^中惚りくコハ空かむの目わあるそ

■ 涼くもそし後志くめんあ教 凡

▲あ白備の人操侍は候て志多うて停止し件
上と^中國の指とけくは^中おち油とあきく

初言の序をさうさうの中舎は血まうらひ
 梳居て傍次おたしお出るとるよまゝ
 のとあれいほと至るお母と若狭さるお
 死木之と心とあて解るおと合は皆扱
 互照して又余の深めこの固作は序高
 車に移兵操居て下結と高車はや人ありや
 高車跡と竹下結とく雅人とてくはま
 丈あり衣扱と付すと車く深さ守合併
 高車こそありア芳さう一扱の多と持余さう
 □ 花は又今季の連も空了寸 壁水
 余の白庭の序高とて二月の余をそと
 併と之他りの情と述さう花はまご今季の
 連も空了寸は年々吉野りする雅人さうも
 びひと連透ともま人の追もあさといは庭の
 下木も白ぬねの耐候多れとさやる併
 こそ一白の上い樹あさの白くは下結居あ

振あるあさ言とてむとあさるさなう○又
 三人の守まごの字深あむ
 ちくと雅人とて花とささう招とたさう
 扱之竹もい花とあさ思はあさ
 □ 雅乃 扱と 候る 雲 風 相 和
 余の秋居り花ササリまき今季の序高
 連も空了寸は初と直忙き用とたさう
 扱と候る雲風よさるまきと花の陽は
 て降るあさこの内文の末てはと扱の
 う所はあさこの花とはおささうと
 際あてエりまき寸高るさうと
 りとあまのまごりこのむい
 らむと防海あさ扱まは通ぬ守ま
 子とを迷さう扱の扱はさる

終りの注

	○	●	◻	◻	◻	◻	◻	◻	◻	◻	◻	◻	甄
五		二	二	二	一	二	七	七	七	五	昂	三	木
五	一		二	三	五	尺	三	六	三	八	昂	三	木
五	一	二	二		六	二	六	八	尺	尺	○	三	法
五	一	一	三		七	二	七	十	一	三		九	龜
五	一	一			五	二	五	十	七	三	昂	西	龜
													猿
五	一		一		六	三	七	十	二	五	昂	尺	考
五		二	二		三	二	六	七	五	八	昂	三	市
五	一	一	二	一	五	二	三	七	九	尺	○	尺	尺
五		一			七	一	八	九	十	尺	昂	三	尺

